北海道大学アイヌ・先住民研究センター × 国立アイヌ民族博物館 共催シンポジウム報告

Center for Ainu and Indigenous Studies Hokkaido University & National Ainu Museum
Joint Symposium Report

ウアイヌコロ コタン（ウポポイ）アカㇲ ワ レ パ オカケタ ～ネコン アン クニ ㇷ゚「共生」ネ ヤ～

uaynukor kotan (upopoy) a=kar wa re pa okaketa ~ nekon an kuni p “kyōsei” ne ya ~

ウポポイ３周年を迎えて　～共生の道をいかに歩むのか～

Reaching the Third Anniversary of UPOPOY
~ How Should We Walk the Path of Ethnic Harmony (*kyōsei*)?

2023 年 7 月、ウアイヌコロ コタン（民族共生象徴空間　愛称：ウポポイ）は 3 周年を迎えました。ウポポイが果たすべき役割には「アイヌ文化の振興・創造等の拠点」であること、また「将来に向けて先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴」であることがあります。

この大きな役割をどのように果たしていくのかを考えるため、3 周年という筋目を契機に、アイヌ テエタワノアンクル カンピヌイェ チセ（北海道大学アイヌ・先住民族研究センター）と、アヌココロ アイヌ イコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）の共同シンポジウムを開催しました。

アイヌ テエタワノアンクル カンピヌイェ チセとアヌココロ アイヌ イコロマケンルは 2020 年 11 月に「学術連携・協力に関する協定」を結び、毎年勉強会やシンポジウムを開催しており、2023 年 8 月 29 日に行われた今回のシンポジウムも同協定による事業の一つとして実施されました。会場（民族共生象徴空間ウポポイ 体験学習館別館 3）には 50 人、オンラインで 150 人が参加しました。

第 1 部で、先住民族の文化展示について、北海道大学の山崎幸治教授による事例報告をしました。第 2 部では、アイヌの歴史と文化がこれまでどのように伝承され、研究されてきたのか、２つの主催団体の代表者が対談形式で振り返りました。そして第 3 部では、北海道大学の北原モコットゥナシ教授をモデレーターとして、実際に事業に従事しているウポポイの職員である杉本リウ（ラリウ）、山道陽輪（ムカㇲ）、北嶋イサイカ、中井貴規（ナアカイ）がパネリストとなり、文化伝承や文化紹介の場でそのように課題や成果が生まれているかを検討しました。

3 年目にして、ウポポイには様々な課題が見えてきました。一つには、2023 年春、アイヌ テエタワノアンクル カンピヌイェ チセの学術ジャーナル『アイヌ・先住民研究 アイヌ テエタワノアンクル カンピヌイェ』第 3 号に特集「アイヌ民族に対するマイクロアグレッション」が組まれ、今回のシンポジウムにも登壇した北嶋イサイカと杉本リウによるウポポイにおける来場者から職員へのマイクロアグレッションの事例と問題性が指摘されました。国連「ビジネスと人権」ワーキンググループは日本での調査結果の記者会見（2023 年 8 月 4 日）においても、民族共生象徴空間のアイヌ民族の職員が「人種的ハラスメントや心理的ストレス（原文：racial discrimination and psychological distress）」をうけているとの報告を懸念していることを述べました[1)]。

今回のシンポジウムをはじめ、ウポポイでは、このような課題を避けることなく、オープンに語り合い、真剣な改善すべき問題として受け止めていきます。同様に、第 2 部の加藤センター長と佐々木館長による対談にも、ウポポイのオープン当初から見

られてきたアイヌ民族とアイヌ文化に対する悪意をもった差別的な批判への応答が試みられています。

シンポジウムのタイトルに「3周年」が大きく示されたことにより、これまでの3年間の事業成果と反省、これから目指すべき指標が話されるであろうというイメージを参加者に与えた可能性が大いにあったのかもしれません。特に、パネルディスカッションでは深刻な課題が取り上げられたことについて冷ややかな反応もあったようです。

参加者による事後アンケートには、当日数名のパネリストが報告中に感極まったことについて言及されました。「感情的になってはいけない」というようなコメントが複数ありました。圧倒的な多数者が構成する社会のなかで、人がそれに対して「弱さ」を見せることに対する嫌悪感（ウィークネス・フォビア）も現象として存在していると言われています。また、「こんなに真剣にやらなければ楽になる」「もっと楽しくやるべきだ」といったような反応もあったようです。

その意味において、今回のシンポジウムも、ウポポイをさらに楽しくするための前段階として、いまは「3周年を迎えて」こそ、実際に現場で起こっている「マイクロアグレッション」のような注目すべき課題にとりかかったことに大きな意義があったと言えるのではないでしょうか。

※本報告は、当日の発表内容をもとに加筆・調整し、適宜スライド・写真を加えて構成します。

1）国連「ビジネスと人権」ワーキンググループ 記者会見 毎日新聞チャンネル 2023年8月4日 https://www.youtube.com/watch?v=wzUwYiYo　54分25秒頃より（2023年11月21日閲覧）。

北海道大学アイヌ・先住民研究センター　×　国立アイヌ民族博物館
共催シンポジウム

ウアイヌコㇺ コタン（ウポポイ）アカㇲ ワ レ パ オカケタ
～ネコン アン クニ ㇷ゚「共生」ネ ヤ～
ウポポイ3周年を迎えて　～共生の道をいかに歩むのか～

【当日プログラム】

日時：2023年8月29日（火）14:30~17:30
場所：民族共生象徴空間ウポポイ　体験学習館別館3
参加費：無料（ウポポイへの入場料金が別途必要）
主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター、国立アイヌ民族博物館

【シンポジウムの進行】

14:30-14:40　開会・趣旨説明

14:40-15:10　〔第1部〕**講演「先住民族展示に関わる事例紹介――海外の博物館を中心に」**
北海道大学アイヌ・先住民研究センター　教授　山崎 幸治

―5分休憩―

15:15-16:00　〔第2部〕**対談「世間のアイヌ・イメージを気持ち良く裏切る」**
北海道大学アイヌ・先住民研究センター　センター長　加藤博文
国立アイヌ民族博物館　館長　佐々木史郎

―10分休憩―

16:10-17:20　〔第3部〕**パネルディスカッション「文化振興と自律性～進化形文化事業」**
モデレーター：
北海道大学アイヌ・先住民研究センター　教授
北原 モコットゥナシ
パネリスト：
民族共生象徴空間運営本部　主事
ラリウ（杉本リウ）
民族共生象徴空間運営本部　主任
ムカㇲ（山道陽輪）
国立アイヌ民族博物館　学芸主査
イサイカ（北嶋由紀）
国立アイヌ民族博物館　研究主査
ナアカイ（中井貴規）

17:30　閉会

第１部　Part 1

先住民族展示に関わる事例紹介――海外の博物館を中心に

Case Studies of Exhibits Related to Indigenous Peoples: Focusing on Museums Overseas

山崎幸治（YAMASAKI Koji, Professor）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授
（Professor, Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University）

はじめに

本講演は、海外での先住民族展示に関わる事例を紹介し、今後の国立アイヌ民族博物館における活動を考える際のヒントとなることを目指しました。そこでは講演者がこれまでに観覧した先住民族展示および関連する実践のなかから、興味深いと感じた５つのトピックを紹介しました。また、子供向けの展示についても補足的に触れました。本稿はその概要を報告するものです。

美術作品の活用

先住民族展示における世界的な潮流のひとつとして、美術作品の活用が挙げられます。そこではアイデンティティやトラウマといった目に見えないことを観覧者に伝えたり、考えさせたりする手法として、美術作品が大きな役割を果たしています。

本トピックについては、アメリカ合衆国のスミソニアン博物館のひとつである国立アメリカ・インディアン博物館（以下、NMAI と略記する）において、2004 年から 2015 年まで開催されていた「Our Lives: Contemporary Life and Identities」展の事例を紹介しました[1)]。

この展示の「On Display」という先住民族が展示されてきた歴史を紹介するコーナーでは、先住民族アートの著名な作家の一人であるジェイムズ・ルナ氏が 1987 年に発表した「The Artifact Piece」というパフォーマンス・アートが写真パネルとして展示されていました。この作品は、博物館の展示室で 19 世紀に作られた展示ケースのなかに作家本人が死体のように横たわるというものです。その様子を写した写真パネルは、先住民族およびその文化が過去の存在として尊厳を無視して展示されてきた歴史を観覧者へ伝えることに成功していました[2)]。同コーナーには、グアテマラ出身の作家ルイス・ゴンザレス・パルマ氏による 1998 年の写真作品「La Mirada Critica（The Critical Gaze）」も展示されていました。写真には、頭にメジャー（巻き尺）が巻かれた先住民族の女性が悲しげな眼をして写っており、観覧者は人種学的な観点から先住民族が身体を計測されてきた歴史と、そこでの悲しみについて考えることになります[3)]。いずれも美術作品を活用することで、当事者にとってはトラウマをも引き起こしかねない辛い歴史を、実際に当時撮られた写真をもちいずに展示することに成功していました。

また、NMAI の１階ロビーに、19 世紀半ばの古い織物と並べて展示されているカナダ出身の作家ブライアン・ユンゲン氏による 2008 年の作品「Blanket #7」（2008 年）にも触れました[4)]。本作品は、北米プロバスケットボールリーグ（NBA）のユニフォーム８着を素材とし、各ユニフォームの胸から下部分を短冊状に裂いて伝統的な技法で編み合わせたブランケット状の作品です。工業製品など近現代的な素材や物をもちいて、先住民族の伝統を感じさせる美術作品をつくる試みは世界各地でおこなわれています。そこに込められるメッセージは様々ですが、いずれも従来の先住民族に対するステレオタイプなイメージを壊し、観覧者に先住民族の「現在」について考える契機を提供してくれます。

複数の視点

歴史を顧みれば、先住民族展示の多くが当事者である先住民族ではなく、社会経済的により権力を持つ非

当事者によって作られてきた歴史があります。よって、展示物に付される解説文も、ほとんどが非当事者の視点から書かれてきました。当事者である先住民族にとって受け入れ難い誤りや偏見に基づいた解説文も珍しくありませんでした。このような歴史を反省し、ひとつの出来事や物を、先住民族と非先住民族といった複数の視点から解説する試みがおこなわれています。

本トピックについては、NMAI において 2014 年から開催されている「Nation to Nation: Treaties Between the United States and American Indian Nations」展と、大阪人権博物館が休館前におこなっていた総合展示におけるアイヌ民族に関する展示の事例を紹介しました。

NMAI での展示については、「言語」についての解説パネルを取り上げました。そこでは、先住民族も新参者であるヨーロッパ人も、ひとつの言語しか話すことできなかったこと、通訳を介しても異なる考え方を伝えることに苦労したことが説明されたうえで、口頭でのスピーチが書かれた文字よりも信頼できるものとする「先住民族の視点」と、書かれた言語の方が記憶よりも確かで信頼できるものとする「ヨーロッパ人の視点」のふたつの視点が並置されていることを紹介しました。本展示では「言語」に限らず、ほぼ全ての解説文が「先住民族の視点」と「ヨーロッパ人の視点」といったふたつの視点を並置する形式で書かれています[5)]。

大阪人権博物館での展示については、結城庄司氏による作品「木彫レリーフ」に付された解説パネルを紹介しました。解説パネルには、学芸員による「結城庄司作。制作年不詳。裏には『結城アイヌ』と署名が刻まれている」という短い解説文の下に、息子である結城幸司氏による「作品として父の木彫りをみるのは、初めてである。アートという目でみれば決して上手な作品とはいえないが、息子として伝わってくるものはある。」という書きだしで始まる「当事者解説」と呼ばれる長文の解説文が置かれていることを紹介しました[6)]。

文化的感受性・尊重（Cultural Sensitivity）

近年、博物館における先住民族の物質文化の取り扱いに関する議論において、文化的感受性・尊重などと訳されることが多い Cultural Sensitivity という概念が重視されています。

本トピックについては、ワシントン D.C. 郊外のメリーランド州シュートランドにある NMAI の収蔵庫としての役割を担う文化資源センターと、カナダのブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館（以下、MOA と略記する）における事例を紹介しました。ここでは展示ではなく、資料へのアクセスや取り扱いに着目しました。

文化資源センターについては、収蔵庫内のある資料の脇に「To be handled by male gender only（男性ジェンダーの方のみ取り扱いください）」といったメモが置かれていることや、先住民族が自らの先祖のものを調査するために当センターを訪問した際に、火を使った儀礼をおこなうことが可能な囲炉裏のある部屋や野外スペースが設けられていることを紹介しました。

MOA については、博物館のなかに「Culturally Sensitive Materials Research Room」という人類学博物館と考古学研究所のコレクションのなかの特に文化的な配慮を要する物を取り扱うための特別な部屋が設けられていることと、人類学博物館が収蔵している品々の先住民族コミュニティにとっての精神的重要性を尊重することを明記したガイドラインなどについて紹介しました[7)]。

これらの実践は、先住民族の品々が博物館に収蔵された後においても、それらの品々を提供したコミュニティによるアクセスを可能にし、その価値観を博物館における資料管理や取り扱いにも出来る限り反映させようとする試みであり、先住民族と博物館との持続的な関係を考えるうえで重要なトピックであることを指摘しました。

見せないことを見せる

本トピックについては、MOA における儀礼に関する展示と、ハーバード大学のピーボディ考古学・民族学博物館の常設展示で講演者が偶然目にした展示ケースについて紹介しました。

MOA については、カナダ北西海岸の先住民族の言語で「隠された品々」というタイトルの解説パネルが添えられた、布で包まれた儀礼用の仮面について紹介しました。布で包まれた仮面がどのようなものであるかは分りませんが、解説パネルを読むことで展示の意図を理解することができます。解説パネルには、この仮面を使用してきた先住民族の伝統として、仮面は儀礼の時以外は人々の目に触れないようにしておくもの

であり、博物館のような場で広く公開されることで心をかき乱されるように感じる人々がいることが書かれています。また、コミュニティのなかにも複数の意見があり、教育的意義から公開すべきという意見と、敬意をもって遠ざけておくべきという意見があることが説明されます。そして、その両方の意見を観覧者に伝えるためのアイディアとして、仮面を布で包んで展示するという手法が採用されたことが述べられています。これは先住民族に関する品々のなかには、博物館で展示することを慎重に検討すべきものが存在することを観覧者に気付かせてくれます。

ハーバード大学のピーボディ考古学・民族学博物館については、2014年に講演者が訪問時に目にした、カリフォルニア北西部の先住民族に関する展示ケースについて紹介しました。その展示ケースのなかには展示物はなく、全て取り外された状態でした。そして、その中央に1枚のパネルと2枚の紙が貼られていました。パネルには「このケースにあった品々は、アメリカ先住民墓地保護・返還法（NAGPRA）に基づき返還されました」と書かれていました[8)]。2枚の紙は同じ内容で、「展示がなくてすみません。現在、私たちは、現代のアメリカ先住民族コミュニティとともに、資料返還とピーボディ博物館との関係についての新たな展示を準備しています。展示が完成しましたら、ぜひまたお立ち寄りください。」と書かれていました。この状況は偶然に生まれたものですが、観覧者に先住民族と博物館との関係や現状をリアルに伝えていたように思います。

当事者の声

先住民族展示において、当事者である先住民族の声を観覧者に伝えるための展示手法については多くの試みがあります。特定の人物が実際に発した特定の言葉をそのまま展示する手法は、歴史の大きな流れを概説するには不向きな面もありますが、第三者的な視点から書かれる解説文にはない観覧者へ訴える強い力を持っています。

本トピックについては、前述したNMAIの「Our Lives: Contemporary Life and Identities」　展、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワの「Tangata o le Moana: The story of Pacific people in New Zealand」展、スミソニアン博物館のひとつである国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館（以下、NMAAHCと略記する）の歴史展示内での「The Reflections Booth」という事例を紹介しました。

NMAIでの展示については、カナダのイヌイットについての展示において、2001年にイェーラ・アルールト氏が述べた「Right now we have a different lifestyle. We can't go back to how it was. It's impossible to be like that now. We have to find a way to help our children and ourselves. Jeela Allurut, 2001（今、私たちは違うライフスタイルを持っています。私たちはかつてのようには戻ることはできません。 今、それは不可能です。 私たちは子供たちと私たち自身を救う方法を見つけなければなりません。Jeela Allurut, 2001）」という言葉が展示されていたことを紹介しました。

ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワについては、大型の縦型ディスプレイをもちいてニュージーランドに移住した太平洋の人々の声を展示している事例を紹介しました。設置された8台の縦型ディスプレイには、話者が肖像画のように一人ずつ映し出されており、順番に自らの経験を語ります。ほぼ等身大の話者が映る縦型ディスプレイは、観覧者の目線の高さに設置されており、観覧者はあたかも画面に映る人物と対面し、語りかけられているような感覚を覚えます。

NMAAHCについては、常設展示が地下3階から始まり、そこから地上に向かって上昇していくという展示導線が、アフリカ系アメリカ人の歴史を意識したものであることに触れたうえで、歴史展示内における「The Reflections Booth」という試みを紹介しました。このブースのなかで、観覧者はアフリカ系アメリカ人の歴史と文化に関する一連の質問に答えるかたちで自らの声を記録することができます。それらの記録は本人の許諾が得られた場合、博物館での展示や博物館のウェブサイトなどで公開されることもあります[9)]。当事者の声を展示するだけでなく、展示の一環として当事者の声を収集するという本実践は、博物館と観覧者との相互作用について考えさせる興味深い試みといえます。

子供向け

今日、対象年齢に幅はありますが、ほとんどの博物館において、子供向けのコンテンツが用意されています。子供向けの展示では、手で触ったり、手を動かし

たり、全身を動かしたりといった体験型のものが主流となっています。これは先住民族展示においても同様です。国立アイヌ民族博物館の「探究展示　テンパテンパ」のように対象を子供に限定しないものも多くあります。

本講演では、ワシントン D.C. の NMAI で子供向けコンテンツを提供している imagiNATIONS Activity Center における事例として、バスケット（かご）を子供の背丈ほどに拡大した模型を作ることによって、その製作技術を理解・体験してもらう展示を紹介しました。この手法は昆虫などの展示で多用されていますが、先住民族展示においても応用可能な手法です。また、カナダのイヌイットがもちいるイグルーと呼ばれる氷の家を建てる体験展示についても紹介しました。氷のブロックを模した柔らかい方形のクッションには番号が振られており、それらを番号順にらせん状に積み上げていくことで、誰でも完成できるように工夫されています。完成したイグルーのなかには入って遊ぶことができます。

子供向けの展示には、安全性や難易度の設定など他の展示にはない難しさがあります。また、小規模の地域博物館でも、地域コミュニティとの密接なつながりを生かした教育的価値の高い子供向けの展示やコンテンツが作られていることも紹介しました。

おわりに

紹介した事例をふりかえり、世界各地の博物館でおこなわれている先住民族展示や関連する実践には、国立アイヌ民族博物館でおこなわれている活動や挑戦と共鳴するものが多いことを指摘しました。そして、先住民族に関わる世界的な潮流のなかに自らの活動を位置づけながら、世界に学ぶだけでなく、世界に向けて発信する重要性を強調しました。また、先住民族コミュニティとの協働が最重要であることを改めて確認しました[10]。

最後に、2022 年に国際博物館会議（ICOM）において採択された、新しい博物館定義を紹介しました。そして、新しい定義に認められる「倫理的（ethically）」、「コミュニティの参加（the participation of communities）」、「省察（reflection）」などの用語は、国立アイヌ民族博物館で試みられている様々な活動とリンクすることを確認しました。

「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」（ICOM 日本委員会訳）[11]

質疑応答では、国立アイヌ民族博物館の笹木一義氏（笹木　2023）によって本定義が検討されており、国立アイヌ民族博物館のミッションである多民族共生に向けた活動が博物館としてなすべき行動であることを論拠づける可能性が指摘されていることを紹介しました[12]。

本講演では、限られた時間内に、できるだけ多くの事例を紹介することに重きをおいたため、各展示における先住民族と博物館との交渉プロセスなどについては触れることはできませんでしたが、今回紹介した諸事例が少しでも国立アイヌ民族博物館の今後を考える際のヒントになれば幸いです。

謝辞

本稿で紹介した博物館のスタッフの皆様には、展示解説や収蔵庫の案内など多大な便宜を図っていただきました。また、当日のシンポジウムでは、国立アイヌ民族博物館のスタッフの皆様に手厚いサポートをいただきました。記して謝意を表します。なお、本稿は JSPS 科研費 JP20K20746, JP21K18391 の成果の一部です。

注

1）本展の準備プロセスにおよび展示については複数の論考（Lamer 2008; Shannon 2014 など）がある。

2）ジェイムズ・ルナ（James Luna: 1950-2018）氏の代表作である「The Artifact Piece」は、1987 年にサンディエゴの人類博物館で初めて展示され、その後もバージョンアップしながら複数の博物館で展示された（Evans 2010; Wakeham 2008）。

3）ルイス・ゴンザレス・パルマ（Luis González Palma: 1957- ）氏の代表作のひとつ。パルマ氏の撮る人物作品の多くは、写真全体が赤茶色などの暗いトーンで覆われるなかで、白目部分のみが白く浮かび上がっていることが特徴とされる。LUIS GONZALEZ PALMA 公式ウェブサイト https://gonzalezpalma.com/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

4）ブライアン・ユンゲン（Brian Jungen: 1970- ）氏は、2023 年現在においてカナダで最も著名な現代美術家の一人である。代表作にバスケットシューズを素材とする、カナダ北西海岸の先住民族の仮面をモチー

フにした一連の作品「Prototypes for New Understanding」などがある。カナダ国立博物館など複数の博物館に作品が収蔵されている。

5）NMAI における「Nation to Nation: Treaties Between the United States and American Indian Nations」展における展示と協働の在り様については川浦（川浦　2019）を参照のこと。

6）大阪人権博物館におけるアイヌ民族に関する展示の概要およびその準備プロセスについては、文（文　2008）を参照のこと。

7）ブリティッシュコロンビア大学の人類学博物館（Museum of Anthropology at the University of British Columbia: MOA）のウェブサイトでは、Culturally sensitive materials に関するガイドライン以外にも、先住民族コミュニティがコレクションにアクセスするためのガイドラインなど複数のガイドラインが掲載されている。MOA ウェブサイト https://moa.ubc.ca/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

8）Native American Graves Protection and Repatriation Act（NAGPRA）Pub. L. 101–601, 104 Stat. 3048.

9）録画された動画の一部は、「Visitor Voices（訪問者の声）」として、NMAAHC のウェブサイトにおいて公開されている。NMAAHC ウェブサイト（Visitor Voices）https://nmaahc.si.edu/explore/stories/celebrating-visitor-voices（2023 年 10 月 28 日閲覧）

10）小坂田（小坂田　2022）は、NMAI と国立アイヌ民族博物館の展示準備過程における「協働」のあり方を比較し、「協働」という同じ言葉をもちいつつも、そのあり方が異なることを指摘している。国立アイヌ民族博物館の開館までの経緯については、佐々木（佐々木　2022）および『ウアイヌコロ コタン アカラ　ウポポイのことばと歴史』（国立アイヌ民族博物館編　2023）を参照のこと。村田（村田　2021）による脱植民地化という視点からの複数のミュージアムにおける展示手法の整理と、それに照らした国立アイヌ民族博物館における展示の検討も合わせて参照されたい。

11）新しい博物館定義の原文は次の通り。“A museum is a not-for-profit, permanent institution in the service of society that researches, collects, conserves, interprets and exhibits tangible and intangible heritage. Open to the public, accessible and inclusive, museums foster diversity and sustainability. They operate and communicate ethically, professionally and with the participation of communities, offering varied experiences for education, enjoyment, reflection and knowledge sharing.” ICOM 日本委員会「ジャーナル：新しい博物館定義、日本語訳が決定しました」https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

12）質疑応答では、新しい定義の採択後に出された論文（笹木　2023）のみに言及したが、2022 年の採択以前においても、国立アイヌ民族博物館と新しい博物館定義との関わりについては関係者のなかで注目を集めていた（暮沢　2022: 281; 佐々木 2022 など）。

参照文献

【論文・書籍等（日本語）】

小坂田裕子 2022「博物館展示における先住民族との協働：国立アイヌ民族博物館と国立アメリカ・インディアン博物館の比較」『境界研究』12: 93-106。

川浦佐知子 2019「進化する博物館：国立アメリカインディアン博物館 Nation to Nation 展における協働のかたち」『人類学研究所研究論集』6 : 58–79 。

暮沢剛巳 2022『ミュージアムの教科書：深化する博物館と美術館』東京：青弓社。

国立アイヌ民族博物館編 2023『ウアイヌコロ コタン アカラ　ウポポイのことばと歴史』東京：国書刊行会。

笹木一義 2023「国立アイヌ民族博物館の展示室で見えてくる、最前線の教育普及活動の課題」国立アイヌ民族博物館編『ウアイヌコロ コタン アカラ　ウポポイのことばと歴史』pp. 180-200, 東京：国書刊行会。

佐々木史郎 2022「国立アイヌ民族博物館の設立と果たすべき役割」『国立アイヌ民族博物館研究紀要』1: 9-39。

村田麻里子 2021「ミュージアムの展示における脱植民地化 :「コロニアル・テクノロジー」を脱構築する手法の検討」『関西大学社会学部紀要』53(1): 141-167。

文公輝 2008「大阪人権博物館の総合展示とアイヌ民族」北海道立北方民族博物館編『北太平洋の文化：北方地域の博物館と民族文化 ②（第 22 回北方民族文化シンポジウム報告書）』pp. 19-24, 網走：財団法人北方文化振興協会。

【論文・書籍等（欧文）】

Evans, L. M. 2010. The Artifact Piece and Artifact Piece, Revisited. In Nancy J. Blomberg (ed.) *Action and Agency: Advancing the Dialogue on Native Performance Art*, pp. 63-87. Denver: Denver Art Museum.

Lamar, Cynthia Chavez 2008. Collaborative Exhibit Development at the Smithsonian's National Museum of the American Indian. In Amy Lonetree and Amanda J. Cobb (eds.) *The National Museum of the American Indian: Critical Conversations*, pp. 144–164. Lincoln: University of Nebraska Press.

Shannon, Jennifer A. 2014. *Our Lives: Collaboration, Native Voice, and the Making of the National Museum of the American Indian*. Santa Fe: SAR Press.

Wakeham, Pauline 2008. Performing Reconciliation at the National Museum of the American Indian: Postcolonial Rapprochement and the Politics of Historical Closure. In Amy Lonetree and Amanda J. Cobb (eds.) *The National Museum of the American Indian: Critical Conversations*, pp. 353-383. Lincoln: University of Nebraska Press.

【ウェブサイト】

LUIS GONZALEZ PALMA 公式ウェブサイト
https://gonzalezpalma.com/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

MOA ウェブサイト
https://moa.ubc.ca/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

NMAAHC ウェブサイト（Visitor Voices）
https://nmaahc.si.edu/explore/stories/celebrating-visitor-voices（2023 年 10 月 28 日閲覧）

ICOM 日本委員会「ジャーナル：新しい博物館定義、日本語訳が決定しました」
https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/（2023 年 10 月 28 日閲覧）

第２部　Part 2

対談　　世間のアイヌ・イメージを気持ちよく裏切る

Dialogue: Pleasantly Betraying the Public's Image of the Ainu

加藤博文（KATO Hirofumi, Professor）
北海道大学アイヌ・先住民族研究センター長
（Director, Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University）
佐々木史郎（SASAKI Shiro, Professor, Dr.）
国立アイヌ民族博物館館長（Executive Director, National Ainu Museum）

司会：第２部は「世間のアイヌ・イメージを気持ちよく裏切る」と題し、北海道大学アイヌ先住民研究センター、センター長加藤博文先生と私ども国立アイヌ民族博物館の館長佐々木史郎が対談形式でお話しいたします。

加藤先生、佐々木館長、どうぞよろしくお願いいたします。

加藤：北海道大学の加藤と申します。本日はよろしくお願いいたします。

通常、講演を行う場合、先住民族に関係するところでは、その土地の大地を守ってきた先住民族の祖先、また現在を生きている先住民族に深く敬意を表すことが一般的です。

その慣例に従って、最初に、先住民族であるアイヌ民族の祖先、それから現在を生きるアイヌ民族、その文化と伝統に敬意を表したいと思います。

今日は、佐々木館長と対談させていただくわけですが、最初に確認しておきたいことは、一般の人々の中には、特定の時代のアイヌ文化を対象として、それが真正の、本来のアイヌ文化であるというようなステレオタイプのイメージがあるのではないかという点です。

この国立のアイヌ民族博物館そして民族象徴空間は、その設立の過程から、展示や調査研究のみに限らず、文化伝承や人材育成、体験、交流、そして情報発信などが基本構想の段階でしっかりと組み込まれていたと思います。この点は他の国立博物館とは大きく違うところなのかなと思います。国立博物館が文化伝承や人材育成、またその精神文化の尊重を博物館機能の中心に据えたことは大きな意味を持っています。設立から三周年経ったわけですが、これまでの活動を振り返るにしても、今後のことを考える上にしてもこれらの点が大事なポイントになるのではないでしょうか。この辺りからからお話を始められればと思います。

もう一つのポイントは、アイヌ民族が主体となって情報発信をすることが、この国立アイヌ民族博物館の大きな柱になっています。第１部の山崎先生のご講演の中でもありましたけれども、やはりそのアイヌ民族が何を社会に対して発信したいのか、どういうふうに自分たちの歴史や文化を発信したいのか、という点が重要になると思います。

私たち研究者の側が今までしっかりと汲み取ってこなかったものの一つに、アイヌ民族自身が自分たちの文化や歴史をどう感じどのように社会に対して発信したいと考えているのかという点があると思います。アイヌ民族自身が理解するアイヌ民族の歴史の姿というもの。また文化というものがどんなものかというところからお話ができればなと思います。

佐々木：イランカラプテ。アヌココロ アイヌ イコロマケンル サパネクル クネ ワ エトゥナンカラセコロ アンペ クネ ルウェ ネ。国立アイヌ民族博物館の佐々木史郎と申します。よろしくお願

いします。

今加藤センター長の方から大変素晴らしい最初のご挨拶がありました。この国立博物館はアイヌ民族の民族としての尊厳を尊重することが出発点になりますので、現在のアイヌ民族とその祖先たちに尊敬の念を表すのは非常に重要なことです。加藤先生ありがとうございます。

このウポポイの設立そのものもやはり民族の尊厳を尊重するところから始まります。その経緯を遡っていきますと、ウポポイの設立の構想を初めて公表したいわゆる有識者懇談会の報告（2009年）から、さらにその前の2007年に出された国連宣言（『先住民族の権利に関する国際連合宣言』）にたどり着きます。その中に先住民族は「文化的発展を自由に追求する」権利（第3条）や「自らの文化伝統や慣習を実践しかつ再活性化する」権利（第11条）を持つということが明記されています。有識者懇談会がウポポイや当館のような施設を創ることを提唱したのも、この宣言を念頭に置きまして、アイヌ民族自身の手によって文化復興（再活性化）を実現することを目的としていました。

しかし、実際こういった施設を作ってみますと、そこでアイヌ文化を復興し、さらに新たに創造に寄与しようと、さまざまな出自を持つ人たちが集まってきます。その中心にはアイヌ民族出身であると自覚する人たちがいるのですが、その他にもアイヌ文化に興味を持ち、その復興発展に携わりたいという人たちが大勢集まっています。日本の本州以南の地域から来た「和人」が多いですが、当博物館の場合には、海外からアイヌ文化に興味を持ってここで働きたいという人も来ています。

実は、ウポポイで働く人だけでなく、観客としてイベントや展示を楽しんでくれている観客も、アイヌ文化の復興と発展に寄与する人たちであるといえます。そのような人も含めれば、世界中のさまざまな人々がいろいろな形でアイヌ文化の復興と発展に関与しています。

そのような状況で、国連宣言で謳われていた文化の復興、発展に関する「先住民族の権利」はどのように保証されるべきなのか？　反対側から、つまり先住民族でない人から見た場合、アイヌ民族以外の人はどのようにアイヌ文化に接し、その復興、発展に関与すべきなのか？というようなことについて、加藤先生にお伺いしたいと思います。

加藤：ありがとうございます。

おそらく今日の第1部の展示のお話とも関わるかと思います。また先ほどの第1部での質疑応答の中にも出てきたと思いますが、やはり「文化とは誰のものか」という問いかけはこれまでも数多く議論されてきましたね。今、佐々木館長がおっしゃったように、国連の先住民族の権利宣言にも明記されている通り、先住民族の文化や歴史は先住民族に帰属するものだという理解は研究者も含めて共通の理解になっていると思います。その意味では研究者も含めて先住民族の歴史や文化にどのように関わっていけばいいのか、という問題は大きな課題であると思います。

これまで先住民族の人たちが、自分たちの歴史や文化を自ら語ることから遠ざけられてきたこと、実際に関わることができなかったという点を踏まえれば、先住民族が自らの文化を語ること、文化を表現することを取り戻すのだという方向に振り子が大きく振れている状況が生じていると思います。

先ほど佐々木館長もおっしゃられたように、この博物館に限らなくてもいいとは思うのですが、日本のような国民国家、植民者の比率が大きな国家の中では、先住民族の文化をどのように語っていくべきなのでしょうか。おそらく国家の中のマイノリティである先住民族だけで語っていくことは難しいと思います。その場合、当然、非先民族であるマジョリティ側が積極的に関わっていく必要性があるでしょう。その際に大切なのは、ある種のマナーであると思います。これは言い換えるとエチケットと言えるでしょうか。難しく言えば、研究者にとっては研究倫理となるかもしれません。

先住民族の文化に対して敬意を表すこと。自分たちの文化ではない他者の文化に自分たちが触れているのだということを忘れないということが大切なポイントになると思います。先ほど

山崎先生も講演の最後のところで博物館の責任に触れる中で、日本語になかなか訳しにくい言葉ですが「アクセシビリティ」という考え方を紹介されていました。この考え方の意味するところは、「利用できる」というレベルにとどまるのではなくて、また先住民族の人たちが博物館に所有されている資料に手が届くというだけではなく、自分たちの手で管理できるということを含んでいると思います。

佐々木：はい、ありがとうございます。

実は私の先輩たちである文化人類学者の研究が、アイヌ民族、アイヌ文化に対するネガティブなイメージを作り上げるのに大きな役割を果たしたのは事実です。例えば「狩猟採集社会」、「未開社会」、「無文字社会」、あるいは「停滞」、「蒙昧」、「文化程度の低さ」などといったネガティブなイメージをかき立てるようなことば、あるいは「自然民族」、「自然経済」といった一見ネガティブに見えないが、実は相手の尊厳を尊重しているとはいいがたいことばを盛んに使って、アイヌ民族やその文化を説明してきたわけです。また、自分たちの思い込みを基にした文化像を創り上げて、それを当の先住民族たちに押し付けてその頭の中まで支配する、ということまで行ってきました。それはいわば「植民地主義的」な行為です。そのような文化人類学に対して他の分野だけでなく、先住民族からも痛烈な批判がなされました。もちろん批判した先住民族にはアイヌ民族も含まれます。1960年代から現代に至るまでの文化人類学の歴史には、過去と現在の自分たちの調査研究のあり方を自省しつつ、研究方法、研究倫理、そして研究分野の枠組みを見直し、その植民地主義的な性格から脱皮しようともがいてきたという一面があります。

私も含め今の研究者は先輩たちがやったことを反省し、その結果先住民族が被った不利益の是正に積極的に寄与していかなくてはなりません。その不利益の一つが、山崎先生と加藤先生が指摘した「アクセシビリティ」の問題です。つまり先住民族が自分たちの文化について語らせてもらえず、触れさせてもらえない状態です。加藤先生にアイヌ民族の文化復興の権利と、アイヌ民族以外の人々の寄与について尋ねたのは、その状態をどのように解消すればよいのかということを確認したかったからです。

うちの博物館もそうですが、アイヌ文化を体現する資料類（実物以外にも文献や映像・音響資料など）を有している博物館は日本だけでなく海外にもあります。その所有権（オーナーシップ）については複雑な問題がありますが、アイヌ民族がそれらの資料を使って文化を復興、振興していこうとするとき、そのような博物館がまず保証すべきものは、アイヌ民族自身がそれらに触れ、語り、そして使用する権利ではないでしょうか。とはいいましても、私立博物館から国立博物館まで、その収蔵資料や展示資料はすべからく人々の「共有物」ですから、使用にはルールが必要です。しかし、先住民族の文化を扱う博物館の場合、国連宣言に則れば、まず先住民族出身の人々がアクセスしやすいルールにする必要があるのではないかと考えられます。つまり、「アクセシビリティ」の保証です。また、理想的には資料の収集、管理から展示、調査研究に至るまで、先住民族自身が主導して方針やルールを決めるべきではないかと考えられます。

当館でそれができているかといえば、まことにお寒い状況であることは事実です。が、この国立博物館のあるべき姿として、そこを目指すという目標は掲げています。

加藤：その意味では、具体的に実際に展示を企画されて、オープンに至るまでに様々な試行錯誤があったと思います。さらに展示がオープンしてからも、展示されているものに対する様々なその問い合わせが、来館する方々から博物館に対してあったかと思います。

私の専門は考古学ですが、考古学でもアイヌ文化を自製品と他製品に分けるという基本的な考え方があります。つまり自製品というのはアイヌの人たちが自らの手で周辺にある素材の中から作り出す様々なものを指します。一方で他製品というのは、アイヌの人たちの重要な活動の一つである交易活動を通じて外の社会から入ってくるものを意味します。そのような他製

品には太刀やマキリ（小刀）といった鉄製品や漆器があります。または木彫りのようなものでも例えば熊の彫物のように後から新たに入ってきたもの、現代化したものがありますね。そのようなものをどのようにアイヌ文化の一部として展示していくのかという難しい課題もあったのではないでしょうか。いろいろご苦労はあったかと思うのですが、開館から三年を経過してどのような印象をお持ちでしょうか。

佐々木：ちょっとここで少し画像を見ていただきたいと思います。

実はこれらの写真に写っているものは、開館当初からネットを中心に差別的な意図を持つ、アイヌ民族否定のための悪意のある指摘がなされてきたものです。どういうことかといいますと、これらはアイヌの自製品ではなく、すべて和人が作ったものであり、こんなものを展示するのは国立博物館としていかがなものかというようなことなのです。

で、結論から申しますと、これらは全てアイヌ文化を体現する、あるいは表象するものです。私のアイヌ語の好きな表現に「カント オロワ ヤク サㇰ ノ アランケ プ シネプ カ イサム」（天から役目なしに下ろされるものは一つもない）というものがあるのですが（実はこの表現は萱野茂さんに教わりました）、それをもじって次のような表現を考えてみました。「イコロ プ オロワ ヤク サㇰ ノ イコロ トゥンプ オルン アサンケ イコロ シネプ カ イサム」（収蔵庫から役目なしに展示室に出される資料は一つもない）。つまり当館の展示室で展示しているものはすべて「アイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進する」（当館の設立理念から）ために欠かすことのできない資料です。

確かにこの写真に写っている漆器類や刀剣類は本州以南で製作されています。ですが、アイヌはこういったものを手に入れてそれに独自の解釈を施して自分たちの文化の重要なアイテムにしています。人間の文化とはそのようなものです。

写真1　「私たちの世界」より
酒器（イクパスイ、トゥキ、タカイサラ、オッチケ）

写真2　「私たちの世界」より
イコロ（刀剣と漆器）

例えば、この漆器類。皆さんから見て向かって左側のですね（写真1）、タカイサラ（天目台）にトゥキ（酒杯の椀）が載って、その上にイクパスイ（奉酒箸）が載せられているものに注目して下さい。これらは、イクパスイ以外は本州以南で生産されたものです（そこに塗られている漆も本州以南で加工されたと考えられる）。しかし、これらは日本文化だとするとおかしいのです。イクパスイが載っていることを除いても、天目台の上に漆器の椀が載っていること自体が奇妙なのです。天目台は天目茶碗を載せるものです。天目茶碗は陶器です。天目台

の上に陶器の碗を載せて、お茶を飲む。それが日本文化での使い方です。しかし、アイヌは陶器の茶碗を漆器の椀に替えて、その上にイクパスイを載せ、それでカムイとともにお酒を飲む。そのようなものに転換したのです。これはまさにアイヌ文化です。

生産できないものはすべてその文化には所属しないとなると、全世界の民族文化、あるいは人類の文化そのものが崩壊します。人類は自分では作れないものを融通し合いつつ、各集団が独自の文化を創り上げてきたわけですから。当館で展示されている漆器類を「アイヌ文化ではない！」と主張する人々は、人間の文化とは何かということを全く理解できていないということを告白しているようなものです。

漆器の上に展示されている刀剣類も同様です（写真 2）。刀剣類や大型の漆器類、すなわちイコロはアイヌにとっては「財産」でした。それを多く持つことはその家の豊かさを表していました。歴史文献でも口承文芸でも、狩りをしてその獲物の一部（毛皮や内臓、骨角など）を持って交易に出かけ、財産となるイコロを購入して帰って、家のしかるべきところに飾るという話がしばしば見受けられます。

写真 3 「私たちのしごと」より　サバサキ

写真 4 「私たちのしごと」より　モッコ

次は「私たちのしごと」のコーナーに展示されているナイフ（サバサキ）についてです（写真 3、写真 4）。これは関西の会社が作った現代のナイフですが、白老のアイヌの漁師が愛用していたナイフです。これは生業として受け継がれてきたアイヌの「漁撈」が、近代以降産業としての「漁業」に転換していく様子を表すために展示しました。明治以降、アイヌの人々は工業製品で手に入れやすくなったナイフを使って魚をさばきながら、捕れた魚を商品として市場に卸す近代漁業に進出していったのです。つまり、変化していくアイヌ文化を展示するのに必要不可欠なアイテムです。

あと結構差別的な意図を持って批判されたのは昆布と木彫り熊です（写真 5、写真 6）。

まず昆布ですが、その収穫とそれを交易品として流通させることは、恐らくアイヌが古くから従事してきた活動と考えられます。昆布の取引は日本の古代史にも登場しますし、近世以降、日本、琉球、さらには中国南部の食文化は昆布だしによって支えられています。まさにアイヌ文化が東アジアの文化に多大な影響を及ぼしたことを示す事例だと思います。その昆布（特に三石昆布）をブランド化することに成功したのが、「私たちのしごと」のコーナーで紹介している幌村運八さんだったので

写真５「プラザ展示」より
荒木繁作『秋の恵み草木をうるおす』

写真６「私たちのしごと」より　昆布漁師のパネル

す。アイヌ文化の存続にとって猛烈な逆風が吹く明治以降の時代の中で、伝統的な産物だった昆布が新たな時代を生き抜く糧として再生していく、そのような仕事に従事した一人のアイヌ民族を紹介したわけです。

先ほど加藤先生も指摘されていました木彫り熊。その起源はいろいろありまして、八雲のクマは尾張徳川家の徳川義親がスイス旅行で持ち帰ったアート作品を元にしているという話があります。しかし、木彫り熊の発祥地は複数あるともいわれ、必ずしも和人が発明したとは言い切れないもののようです。観光用のお土産、あるいは現代のアート作品にもアイヌの伝統が息づいています。

プラザ展示で撮影したこちらの二つの写真ですが、先ほど山崎先生が紹介していた昔のもの（19 世紀に作られたもの）と現代のもの（20 ～ 21 世紀に作られたもの）の対比を行っています。向かって左側の写真（写真 7）の資料は幕末から明治ぐらいの時代に作られたと考えられる作品です。左上の少々風変わりな文様が描かれたお盆は 1850 年代にエトロフ島で活躍したといわれるシタエホリあるいはシタエーパレと呼ばれる彫刻の名人の作品です。この人は松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』にも登場します。その他にも同じような時代に製作されたと

写真７「プラザ展示」より　伝統の木彫品
左上のイタ（盆）は幕末期エトロフ島で活躍したシタエーパレ（シタエホリ）の作品と伝わる。他の木彫も幕末期から明治期の作品

写真８「プラザ展示」より　現代の木彫作品

考えられる手ぬぐいかけ（上中の作品）や茶托（下右）も展示していますが、これらは本州以南から来る旅行者のための、あるいは本州で販売するための土産品と考えられます。幕末から明治初期の時代には外国人旅行者が横浜の古物商でアイヌの作品を購入するということも珍しくなかったようです。つまり、すでに150年以上前からアイヌ民族は外から来る人々向けの土産物を製作し、それを技術の維持、向上の機会として利用していたといえるでしょう。

このような当時の優れた彫刻技術が現代でも受け継がれていることを示すのが右側の写真です。木彫り熊もそのうちの一つとして紹介しています（写真8）。

当館の基本展示は、深掘りしていくと実は今までのアイヌ民族やアイヌ文化のイメージが変わっていくように設計されています。

かつて文化人類学の先輩たちがアイヌ民族について広めたネガティブなイメージは、「植民地主義的」な研究によって創り上げられたものであり、現代の視点で見れば全く「適切」なものではなく、当館の理念にいう「正しい認識と理解」ではありません。しかし、このようなイメージは完全に払拭されていないと思われます。例えば、アイヌは狩猟採集だけでなく、交易も行っていたという知識は持っていても、それは小規模な「物々交換」だったと思っていませんか？　でも江戸時代までのアイヌの交易の実態は、「未開社会」の自給自足を補うだけの「物々交換」とは似ても似つかない、大規模で複雑な経済活動の一環だったのです。そのように、いまだに一種の偏見のように多くの人の頭にこびりついているイメージを是正してもらう、もっと過激にいえば、それを「破壊」してより現実に近いイメージを持ってもらうというのも当館の展示のねらいの一つです。この対談のテーマである「世間のアイヌ・イメージを気持ちよく裏切る」とは、それをソフトにいいかえたものです。また、他のいろいろな面でもより現実に即したイメージを持っていただけるように、従来のイメージを裏切っていきたいなと考えております。

加藤：近年、新しい学習指導要領に移行し、高校の教科書も新しく変わり、沖縄についてもそうですが、アイヌに関わる記述が大幅に増えましたね。

ですけれども、やはり新しい教科書を見てもまだアイヌ文化や琉球文化の取り上げられている時代は、特定の時代、例えば中世であるとか近代とかに限られていて、現代の部分での記述も増えましたが、まだまだ不十分な点があると思います。私たち研究者もそれから博物館関係者もクリティカルに、批判的に過去の研究を検討し、今一度見直す必要がありますね。

佐々木館長が先ほどおっしゃられたように、これまで創られてきた、押し付けられてきたイメージを壊すということが大事だと思います。

今、具体的にスライドを使いながらご説明いただいたように来場する方々が持っているアイヌ文化のイメージが博物館の展示を見終わったときには壊される、新たなものに変わっている、というのがやはり理想的なのだろうと思います。

文化は常に変わっていくものであること。その文化を実際に運用している人たちがいる限りその文化というのは決して死ぬこともないですし、新しいものがどんどん創造されていくのだという理解が大切だと思います。博物館自身がそういう役割を積極的に担っていくことが大事なのではないでしょうか。

佐々木：確かにおっしゃる通り、やはりうちの博物館を見終わった後、アイヌ民族に対するイメージを一新してもらいたい、昔私たちの先輩が創り上げ、押し付けてきたある種のイメージを取り除いていただきたいなというのがあります。

で、先ほど加藤先生が「文化は常に変わっていくもの」であり、「実際に運用している人たちがいる限りその文化というのは決して死ぬこともないですし、新しいものがどんどん創造されていく」とおっしゃいました。確かに歴史を見ると私が知るだけでも、例えば江戸時代から明治、大正、昭和、平成と、アイヌ文化はどんどん変わり続けています。ですが、江戸時代から時間を逆に遡っていくと一体どこまでたどっていけるのか。

私たちが今博物館の中でもう一つの重要な

問題点として感じていることに、考古学上、擦文文化期が終わるとされる13世紀以降に「アイヌ文化期」という時代が設定されているということがあります。これに関しては、「アイヌ民族は13世紀に北方から北海道に移住してきたのであり、先住民族ではない！」などという「とんでも学説」がネット上に流布し、書籍にもなり、ウポポイ開業当初はこのような説を元に博物館に抗議の手紙を送る人が結構いて、驚くとともに、対策の必要性を痛感しました。もちろん、このような主張は学術的な根拠のないフェイクです。ですが他方で、擦文文化期が終焉を迎える13世紀を中心に、土器と竪穴住居が姿を消して、近世以降のアイヌ文化に近い文化を持つ人々が文献に登場するようになるのも事実です。そこで、考古学をご専門とされている加藤先生に、このようなちょっと見には断絶に見える現象は考古学的にどのように説明できるのか、そこには本当に人と文化の断絶があったのか、それとも実は連続していたのか、そのあたりのことをお伺いできればと思います。この問題はアイヌ民族が構築する「アイヌ史」（当館でもそれを展示するのが「歴史展示」です）を時間的にどこまで広げられるのかという議論にかかわるところですので、よろしくお願いします。

加藤：北海道における「アイヌ文化期」という時期区分と名称について考古学が果たした役割とその影響は大きく、責任があると感じています。

この「アイヌ文化期」という時期区分について次のように考えています。つまり「アイヌ文化期」という時期区分があるために、13世紀頃にアイヌ文化がいきなり成立したかのような言説が生まれてくるのであれば、そこでイメージされている「アイヌ文化」とはどんなものをイメージしているのか。逆にそのような主張や質問に対して質問することが必要なのではないでしょうか。このようなアイヌ文化とは何かという文化の本質を問うような質問に対しては、アイヌ文化を日本文化に置き換えたときに、どのように考えるのか。そのような質問や疑問を持った人たち自身はアイヌ文化に対して感じた質問を日本文化に置き換えた場合にどのようにイメージしますか、という問いかけを行うことも必要なのではないでしょうか。

仮に、日本文化が13世紀に成立したとか、10世紀に日本文化が成立したという説明がなされた際には、何をもって日本文化の成立と捉えるのでしょうか。日本文化を見ても文化とは常に変化しているものといえるのではないでしょうか。

13世紀頃にアイヌ文化が成立したという説明が出てきた背景には理由があります。物質文化に基づいて歴史を考察する考古学から見ると、このころに確かに北海道では人たちの物質文化が大きく様変わりをしました。

しかし、その変化は13世紀にいきなり生じたのではありません。少しずつ12世紀から13世紀という時間幅の中で段階的に起きています。そして物質文化の大きな変化が生じたことは事実であると言えます。

具体的には、長年維持されてきた土器を作る文化伝統がなくなることや、竪穴型の住居に暮らしてきた生活の様式が変わって平地型の住居に変わることが挙げられます。調理施設では竈の文化から囲炉裏の文化に変わりますし、自らが製作した土器の代わりに漆器や鉄鍋が外の世界から入ってきます。人々も使う生活文化の中にいくつかの新しい様子を見出すことが可能です。

しかし、重要なことは文化が変化しても、そこに暮らしていた人たちが集団的に前の段階と後の段階で入れ替わったということは、人類学も含めて確認されていません。集団交代は起きていないのです。文化は変化しても、集団は連続しています。

博物館などでは、文化や時代の変遷として、縄文文化があって、その後に弥生文化が成立してという文化編年が示されています。北海道でも同様に人々の生活文化の変化をいくつかの段階の変化として示しています。私はこの文化の変化の段階や名称は、どのようにも組み替えが可能なのだろうと考えています。

「アイヌ文化」の成立を13世紀の文化変化に求めることも一つの仮説として成り立つでしょう。これは一つの考え方で、作業仮説でしかありません。別の見方をすれば、変化のタイミン

グである時代の画期は10世紀でもおかしくはないし、7世紀や5世紀でもおかしくはないといえます。またアイヌ民族の歴史として北海道の歴史全体を捉えるならば、縄文文化や旧石器文化の段階までアイヌ民族の歴史であるということには変わらないわけです。

問題は時代や文化の区分にはいくつもの考え方や理解の仕方があるということが、博物館の展示や解説書みたいなところに示されていないことにあるのではないでしょうか。

また北海道のアイヌ民族の歴史を編む作業や歴史を作るという過程に、アイヌ民族自身が関わる機会がこれまでほとんどなかったということが大きな問題であると思います。

アイヌ民族が関わらずに、研究者によって歴史観が作られ、研究者によって作られた文化編年が博物館展示を通じて発信され、社会的に共有されてきました。いまだに研究者たちが考え、編みだした歴史観をアイヌ民族が受け入れるという状況にあります。残念ながらアイヌ民族も参画しながら自分たちの歴史を描くという試みは、まだなされていません。

私たち研究者の責任を押し付ける訳ではありませんが、この問題の解決は国立アイヌ民族博物館の仕事の一つなのではないでしょうか。国立アイヌ民族博物館には、北海道独自の、アイヌ民族独自の歴史をアイヌ民族の参画を得ながら作っていくという、大きな役割を担っていただきたいと思います。

佐々木：ありがとうございます。アイヌ民族が直接参画しないまま、研究者だけで「北海道の歴史」や「アイヌ民族の歴史」というものを構築してきたのは、やはり大きな欠陥だったということですね。それは文化人類学がアイヌ民族を抜きにしてその文化像や社会像を創り上げて、押し付けてきたことと共通する問題だと思います。これに関する当館の使命は、アイヌ民族主導で地域と民族の歴史を編み、文化像を創り上げる場として機能させるということでしょうか。たやすい話ではありませんが、是非実現させていきたいと考えています。

それからこれはちょっと宣伝になりますが、9月16日から当館で『考古学と歴史学からみるアイヌ史展—19世紀までの軌跡—』という特別展示を開催します（2023年11月19日に終了）。ここでは考古学の研究成果としての考古遺物と、歴史学の研究成果としての歴史文書を中心に展示しますが、その主な目的は、これらの展示物を見て、「アイヌ史」とは何かということを、アイヌ民族を中心としたさまざまな人と議論していくことにあります。このような議論は今回の展示で終わりではなく、歴史を扱う展示をシリーズ化して継続していく予定です。現時点ではまだ「アイヌ民族を交えて」とまでしかいえないのですが、将来的には、アイヌ民族が主導してこのような展示を制作し、議論を進めるというのがあるべき姿かと思います。そのためにはアイヌ民族出身の考古学者や歴史学者を育成することが急務ですが。「アイヌ史」というものは基本的にはアイヌ民族、アイヌ文化の時間軸に沿った広がりですが、もう一方で、アイヌ民族、アイヌ文化の地理的な広がりにも着目しないといけないのではないかと思います。そこで、加藤先生にお聞きしたいのですが、考古学の分野では縄文文化にせよ、擦文文化にせよ、オホーツク文化にせよ、現代のアイヌ文化に連なる一連の文化の地理的な広がりというものをどのように捉えているのでしょうか？

加藤：先史時代を含めて北海道の歴史は、今の日本の国土、つまり日本の国境線の枠の中だけで議論することはできないと思います。

例えば、旧石器時代はもう言わずもがなですし、縄文文化も北海道の縄文文化はサハリンやアムールの下流との繋がりを持っています。北海道の歴史は、アムール下流やサハリン、千島列島からカムチャッカまで含めた広範囲で考えていかなければいけないと思います。

先住民族の文化を学ぶことによって、逆に日本史という国家の枠の中で論じられる歴史から、国境を超えた広い地域の歴史が見えてくるのではないでしょうか。

佐々木：ありがとうございます。考古学でもやはりそういう考え方で、なるべく北海道だけで閉じないでその周辺をもっと広く視野に入れて検討し

なければいけないということですね。この博物館のもう一つの来館者のイメージを裏切る要素として、アイヌ民族が暮らしてきた世界の地理的な範囲と文化の多様性があります。（図１参照）

図1　アイヌの過去／現在の居住地域

- アイヌ文化はアイヌ民族が居住してきた北海道，樺太（サハリン），千島列島，本州東北地方を中心に，周辺諸民族、諸地域との関わりの中で醸成されてきた。
- 現在では北海道に暮らすものが最も多いが、東京，関東圏，関西圏，極東ロシア，さらには日本，ロシア以外の国にも居住している。

右図：国立民族学博物館特別展『千島・樺太・北海道・アイヌのくらし』2011年10月6日～12月6日で使われたパネルより（一部加筆あり）

この会場にいらっしゃる方々、あるいはリモートでご参加の皆さんにおそらく共通するのではないかと思うのですが、「アイヌ」というとどうしても北海道と結びついてしまうのではないでしょうか？　でも、アイヌ民族が暮らした世界の地理的な広がりは北海道に留まらず、北は樺太（サハリン）、北東は千島（クリル）、カムチャツカ、そして、南は津軽半島と下北半島まで広がります。これは 17 世紀以降文献で知ることができる範囲でして、それ以前にはもっと南にも広がっていた可能性はあります。例えばアイヌ語で解釈できる地名が東北地方の北半分には確実に見られます。

樺太と千島には明治以降もアイヌ民族が暮らしていました。彼らは 19 世紀後半以来日ロ間の国境紛争に巻き込まれ、その意志にかかわらず繰り返し移住を余儀なくされました。現在樺太アイヌと千島アイヌの子孫の大半の人々は北海道で暮らしています。一部関東地方など本州以南に移住した人びともいます。それは彼らの居住地が戦後ソ連に占領されたからで、いわば強制的に追い出された結果です。樺太ではわずかですが残留した人もいたようで、その子孫は現在ロシア連邦の国籍を持ってサハリン州の他、ロシア各地に暮らしているようです。

ここで忘れてはならないのは、樺太アイヌと千島アイヌは大枠としてのアイヌ文化を共有しながらも、北海道アイヌとは異なる歴史を歩み、独自の方言と地域文化を育んできたということです。それを理解しないと、樺太アイヌや千島アイヌが独自の苦しみや悲しみを持ち、また同時に独自の誇りを持つことを見落とすことになります。

アイヌ民族の交易活動はこの北海道、樺太、千島を越えて広がります。その文化的なインパクトはさらに拡大してユーラシア大陸を飛び越えてヨーロッパにまで波及します。

実は 18 世紀末から 20 世紀初頭までヨーロッパ人がアイヌ民族、アイヌ文化に高い関心を示し、大量のアイヌ資料を買い集めました。今の視点で見ればきわめて帝国主義的で植民地主義的な考え方に基づく関心の持ち方であり、資料収集だったのですが、アイヌ民族の存在はヨーロッパの知識人に絶大な影響を及ぼしたようです。元ボン大学教授で法政大学教授でもあったヨーゼフ・クライナー先生によれば、ドイツで

はアイヌ資料を所蔵していないと一流の博物館とみなされなかったともいわれます。アイヌ文化はそのくらいの大きなインパクトを持っていました。

現在、アイヌ資料はドイツのみならず、ヨーロッパ、ロシア、そしてヨーロッパ人が移住して建国したアメリカ、カナダの博物館に収蔵されています。それは100年前までの帝国主義時代、植民地主義時代の遺産ですけれども、今のヨーロッパやアメリカの博物館はその意義を見直して、先住民族の文化の復興と新たな創造に積極的に寄与する方向での活用をめざしています。そのために、当館やウポポイ全体に協力を求めてくることがあります。それにどのように対応するのかということも、当館やウポポイにとって先住民族どうしの交流を促進することと並ぶ重要な国際的案件です。

司会：ありがとうございます。

まだまだ話はつきませんが、会場の皆さんから質問などがあれば伺いたいと思います。ご質問のある方、挙手をお願いいたします。

参加者１：ありがとうございます。

国連の権利宣言という形で、上から来たわけですが、実際にここで暮らしているアイヌの人たちがいて、コミュニティの人たちがいて、その人たちの声をどういうふうに博物館を作るにあたって活かしてこられたのかという話をお聞きしたいです。

佐々木：私たちにとっては厳しい質問ですが、実はアイヌ民族自身が博物館を使って自分たちの文化を表していこう、復興しようという動きは、100年以上の歴史があります。ですから、アイヌの人たちの中には博物館をどう活用していけばいいかきちんとわかって活動をしている人たちが結構います。白老にもそのような地元のアイヌが運営する博物館があり、ウポポイと当館はそれを基礎にしていますし、そこで働いていた人たちが運営の中核を担っています。

それから、国連の宣言が出されて日本の政府が動き、それからウポポイ設立の気運が高まったという流れもありますが、実はそれより遥か前にアイヌ民族自身が国連の作業部会などに加わって、自分たちの意見を反映させて来ました。2007年の国連宣言の作成にもアイヌ民族がかかわっています。国が動くにはそのような背景もありました。いわば、アイヌの声に押された形でこういう施設を作ったという面もあります。

アイヌ政策を検討する政府の委員会には当初、アイヌ民族出身の委員がいないというケースもありました（まだ20世紀の段階）。ですが、この博物館の構想や計画を検討する委員会が組織された時代（2010年代）には民族出身の委員が入るのが当たり前になり、その比率を高めることが求められました。当館の基本展示を設計する時に組織したワーキンググループではメンバーの4割ぐらいがアイヌ出身の研究者、博物館員、文化伝承者だったと記憶しています。さらに実際に展示を作り上げるときには、白老だけでなく北海道各地のアイヌの文化伝承者の人たちの協力を仰ぎ、展示物の製作や映像制作に参加してもらっています。さらに本州以南や海外在住の方々にも協力してもらっています。当館の基本展示は北海道のみならず日本中、あるいは海外までふくめて、広くアイヌの方々の声を反映させています。

司会：他に質問はないようです。

本日も夜間20時まで開館していますので、センター長と館長のお話を聞いた後に、内容を思い返しながら、もう一度展示も見直していただけます。そういうことだったのかと今まで持っていたイメージが覆えるようなことがあると思います。ぜひ展示の方もお楽しみください。

また、館長からお話がありましたけれども、第7回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展」のチラシを皆様にお配りしております。9月16日以降、特別展もご覧いただければと思います。

それでは、あらためまして、加藤先生、佐々木館長に拍手をお願いいたします。

ありがとうございました。

第3部　Part 3

パネルディスカッション　文化振興における自律性－進化形文化事業

Panel Discussion: Autonomy in Cultural Revival – Evolving Cultural Projects

モデレーター　Moderator

北原モコットゥナシ（KITAHARA Mokottunas, Professor, Dr.）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授（Professor, Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University）

パネリスト（当日発表順）Panelists

ナアカイ（中井貴規）（Naakay, NAKAI Takanori）
国立アイヌ民族博物館　研究主査　（National Ainu Museum, Senior Fellow）

ムカラ（山道陽輪）（Mukar, YAMAMICHI Yōmaru）
民族共生象徴空間運営本部　主任　（UPOPOY National Ainu Museum and Park, Team Leader）

イサイカ（北嶋由紀）（Isayka, KITAJIMA Yuki）
国立アイヌ民族博物館　学芸主査　（National Ainu Museum, Senior Fellow）

ラリウ（杉本リウ）（Rariw, SUGIMOTO Riu）
民族共生象徴空間運営本部　主事　（UPOPOY National Ainu Museum and Park, Cultural Programs）

モコットゥナシ：ここからの進行を務めます、北海道大学の北原です。よろしくお願いいたします。ウアイヌコロ コタン（民族共生象徴空間のアイヌ語名称。愛称ウポポイ）の設置から3年を迎えました。北大センターのスタッフも様々な形で協力関係を結んでいますので、ともに迎えた3年目という思いがあります。3年前、この研究連携協定が発足した年の合同シンポジウムでは、「共生」の内実をテーマにしました。そこから3年の間にどのようなことを感じて来たか、到達点と課題について、皆さんからご発言をいただきたいと思います。

私たち登壇者は、共生とは、双方の歴史を踏まえた「認め合い」のことではないか、と考えています。一方でこの施設には「まるでテーマパークだ」という批判もあり、また「テーマパークとして盛り上げて行こう」という意見もあります。

また、この施設の役割として、設置段階ではこのように位置づけられていました。ウポポイのHPの説明を引用します。

「ウポポイ（民族共生象徴空間）は、〈中略〉アイヌ文化の復興・創造等の拠点として、また、将来に向けて先住民族の尊厳を尊重し、差別のない多様で豊かな文化を持つ活力ある社会を築いていくための象徴として位置づけられています」

このように、ウアイヌコロ コタンの大きな意義として「文化復興の拠点」であることが挙げられています。一方、開業以前から、この施設に「観光の起爆剤」としての役割を期待する声も少なくありません。

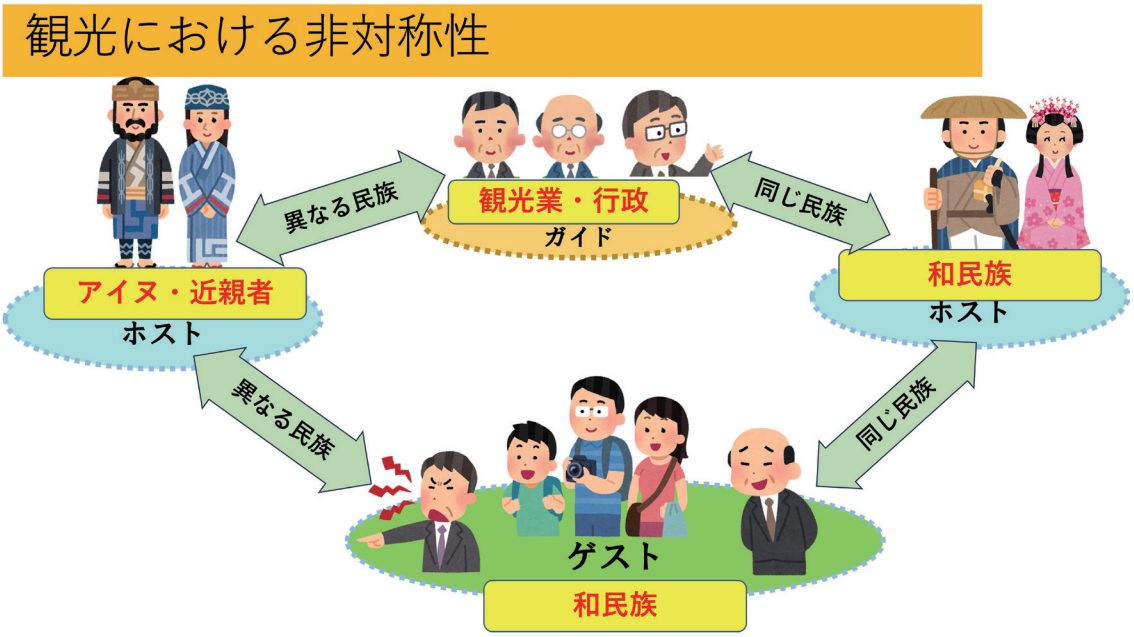
観光拠点やテーマパーク的取り扱いには、アイヌ民族を中心として強い反発があります。これに対し、開業支援をする和民族研究者の中からも、「あまり野暮なことを言わないで、本物の村のように見せるなど思

い切り演出をして観光客を楽しませるのも選択肢ではないか」という意見が出たことがあります。この施設の経済効果を重視する人々には、これに近い考えがあるのかも知れません。

私は、観光そのものは否定する立場ではありませんし、学びに楽しみの要素が入ることも良いと思います。ただ、現実問題として、例えばアイヌ文化と日本文化を観光の場で同じく取り扱うことはできません。

例えば、アイヌ民族・文化をテーマとする観光で、復元家屋を建て、民族衣装を着たスタッフを配置することには、以前から強い批判があります。それは、生きた人を見世物にする行為であり、アイヌは「このような前近代的な家屋に今でも暮らしている」という誤解を助長するものだという批判です。この意見には賛同するところがありますし、私も旧ポロトコタンで5年間勤務して、来場者が本当に「ここに住んでいる」と誤解するところや、スタッフに対して非常に侮辱的な態度を取る場面を直接見て来ました。

しかし、ここで考えてみたいのは、例えば日本の江戸時代の屋敷を復元し、侍やお姫さまや忍者の衣装を着たスタッフのいる施設で同じような問題が起こるだろうか、ということです。



そこで1日楽しんだ人々は、今の和民族がそのような暮らしをしているとは考えません。はしゃいでマナーを乱す人が多少いたとしても、お姫さまや侍を侮蔑の対象とはしないでしょう。観光には、ゲスト（客）・ホスト（受け入れスタッフ）・ガイド（旅行業者や施設運営者など仲介役）という三つの立場があります。アイヌ民族に関する観光では、ゲストは主に和民族、ガイドも和民族や有力なアイヌ、ホストはアイヌやその配偶者の和民族など、という形態が多く見られます。いっぽう、江戸の文化を扱う観光の場合には、ゲストもガイドもホストも主に和民族だと考えられます。

このようにアイヌ文化と日本文化では、観光資源化するときの状況が大きく違います。紹介される人々が現在どのような暮らしをしているか、といった前提、予備知識にも大きな差がありますし、敬意の持たれ方も大きく異なります。観光地までやってきてアイヌに侮蔑的な振る舞いをする人々は、ここで初めて偏見を持つのではなく、元々持っていた偏見に基づいた行動をすることも多い、と考えた方がよいでしょう。

アイヌ文化と日本文化、アイヌ民族と和民族のこうした環境の差を見ずに、「楽しませればよい」という議論はできません。アイヌ民族に関する研究教育機関は、楽しい体験の提供と、予備知識の欠如・あるいは悪しき予備知識を修正することを両立する、という課題を持っています。

そして、民族共生を進めるとは、言い換えれば人と人との関係調整を行うことです。文化と人を切り離し

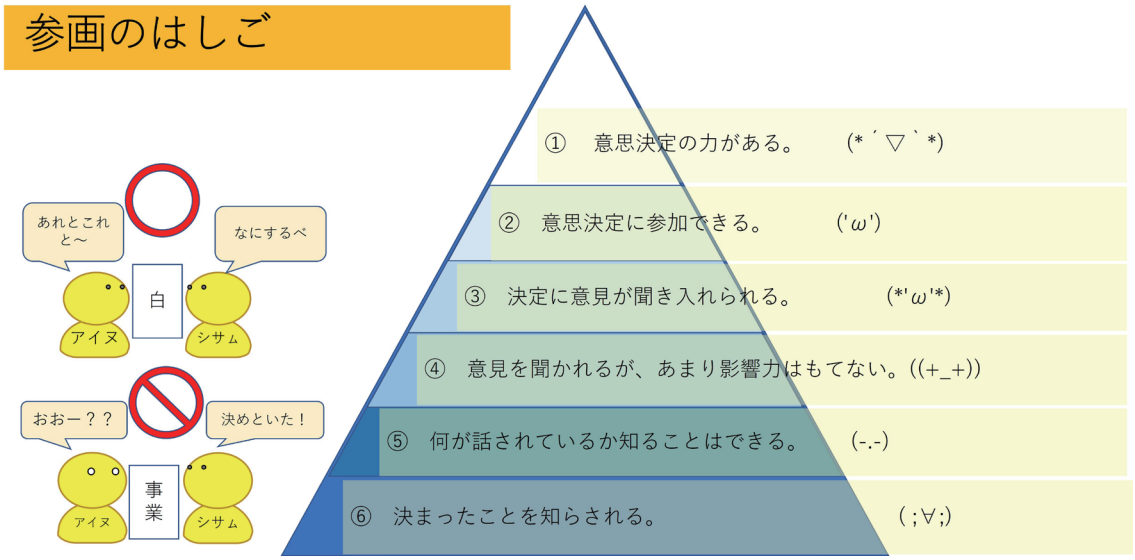
て、文化だけをコンテンツとして楽しんでしまうことはできますが、それでは、人と人との関係調整はできません。また、一般に、マイノリティについての啓発では、その人々を「理解しよう」というメッセージが発せられます。例えば、アイヌについての啓発教材などには「アイヌ民族を理解しよう」という文言が目立ちます。ただ、様々な制度や常識など、社会の在り方を決めるパワーを持っているのはマジョリティですから、マイノリティが居心地の悪さを感じる社会や環境も、マジョリティが作っているものだと言えます。ですから、理解の対象としては、むしろマジョリティの方が重要です。ウアイヌコロ コタンや北大センターなどアイヌ研究をする機関の課題としては、和民族についての研究や理解促進も急務だと言えるでしょう。

さて、このパネルディスカッションでは、テーマを「文化復興における自律性－進化形文化事業」としました。

ポイントは大きく２つあります。１つ目は、組織としての研究・教育・普及のあり方を決める場にアイヌが参画できるかどうか。例えば、アイヌ文化をどのように定義するか、という問題があります。先ほどの対談で触れられていたように、一般にはアイヌ文化を近代以前の非常に狭い時期に限定し、それ以外は「アイヌ文化ではない」とか「本物ではない＝非真正なもの」として扱う、という見方が少なくありません。また、人々の暮らしの様々な領域、言葉、衣食住、歴史などのうち、どこにどの程度注力するのか、またそれをどこまでどのように見せるのか、ということも検討課題です。例えば、日本の寺や神社では、重要な仏像や神体などをどのように公開するかはそれぞれが決めていますし、日本社会において重視される遺跡は、どれほど貴重なものであっても調査が制限されています。和民族が自文化の取り扱いをコントロールできているといってよいでしょう。山崎さんのお話ではアメリカの事例を取り上げていただきました。

同じように、アイヌの信仰に関わる道具や神体、遺骨などをどのように扱うか、どこまで研究し、公開するか、といったことにアイヌの意向が反映されてこそ、精神文化の尊重と言えるでしょう。例えば神聖な器物を展示などで公開することの是非について、展示のたびごとにきちんと討議する場が必要です。

これは「参画のはしご」と言われる図です。



三角形の上に行くほど、高いレベルで意思決定に関わることができます。ウアイヌコロ コタンのなかで、①や②のポジションに着くことができているアイヌはごく少数でしょう。意思決定のための作業は大変な負担ですから、数人でこなせるものではありませんし、多様な意見を取り込むためにも、多くの人が関われる必要があります。それが、職員の人権を守ることにもなります。

もう１つ、職員の自律性を守るためには、外的なリスクにどのように対処し、安心・安全な勤務環境を作るかということがあります。ちょっとここで感情労働という言葉を見ておきましょう。

感情労働

感情を高める（楽しげにする等）または抑える（怒らない等）ことによって行われる労働。ストレスが深刻化することがある。

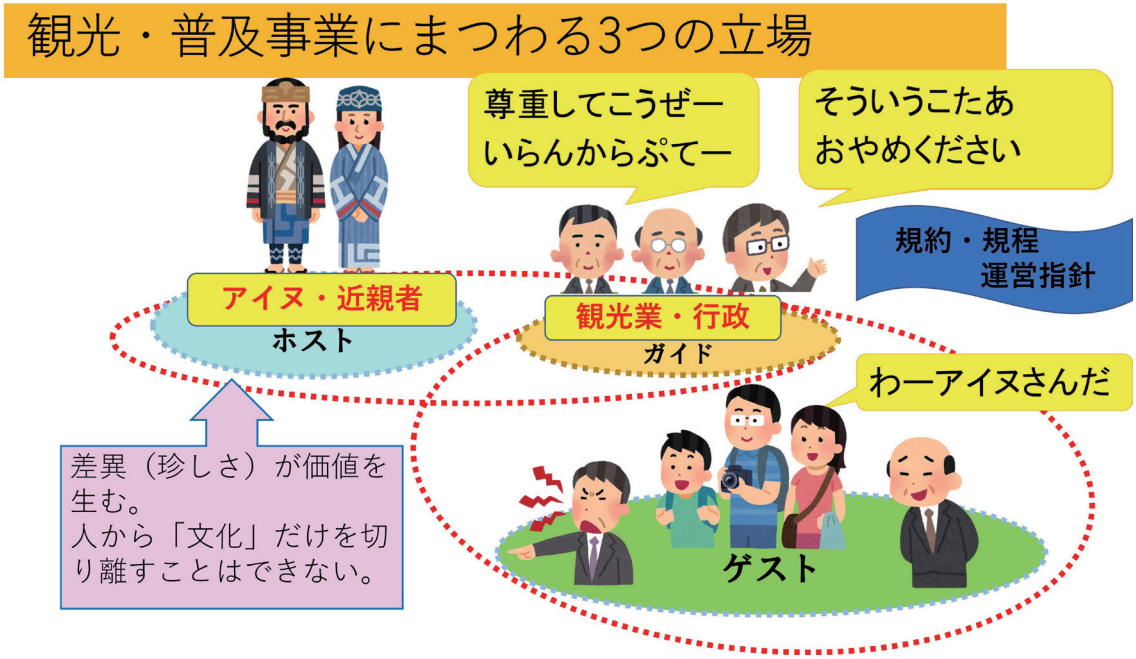
仕事において求められる通りに、感情をコントロールし、楽しげにするまたは抑える（怒らない等）ことを伴う労働です。例えば、迷惑行為をする利用者にも楽しげに接しなければならないといった環境では、ストレスが深刻化することがあるので、事業者は事業計画の中にケアを含めておく必要があります。また、さきほどの観光における、ゲスト（客）・ホスト（受け入れスタッフ）・ガイド（旅行業者や施設運営者など仲介役）という三つの立場を確認すると、ゲストは主に和民族、ガイドも和民族や有力なアイヌ、ホストはアイヌやその配偶者の和民族、という形態が多い。そして、ゲストの期待に応えるべく、ガイドが「アイヌの原始性を強調」するであるとか、どんな客でも笑顔で応じるよう感情労働をホストに求めるといった形で、非人道的な働き方を強要してきました。

旧ポロトコタン時代も、来場者からの見下しや侮辱、様々なハラスメントが放置され、ホストには屈辱を「やり過ごす」という対処しか認められてきませんでした。単に侮辱に耐えるだけでなく、なるべく客が喜びそうなことをしなければならないという有形・無形のプレッシャーもあります。旧博物館（町立民俗資料館）の初期の展示では擦文土器など歴史展示がされていましたが、これを「客が喜ばない」という理由で撤去したり、あるいは屋外展示の中で、来場者に見せるために連日儀礼を挙行したりと、施設全体として来場者の好奇心におもねる方針が取られてきました。文様が魔除けの意味を持つと強調すること、歌や舞踊が「信仰から生まれた」など、過度に精神性を強調することも、形を変えた「原始性」のアピールです。

こうしたマジョリティからのプレッシャーや、差別的言動、マイクロアグレッションなどの危害も、職員の自律性を脅かす大きな要因ですし、ハラスメントのストレスが離職につながることもしばしばありますから、就労の継続に関わる根本的な問題でもあります。民族共生の象徴となる空間では、これまでの観光のあり方を全面的に改め、やたらにカムイを連呼することを慎み、また、職員の安全性に十分な配慮をすること、外部からの利用者も、アイヌの人権に配慮して行動しなければならない、という当然のことをメッセージとして打ち出していく必要があります。

そのための具体的な方策を考える上で、北海道大学が作成している安全教育のための資料がたいへんわかりやすいので紹介します。

職場環境におけるハザード（潜在的危険性）と被害の起こりやすさを把握すること、それらを小さくすることが推奨されています。また、1 つの重大事故の背後に 29 の軽微な事故、300 の危険な状態（ヒヤリハット）がある、という認識も非常に参考になります。民族性に基づく差別的言動などのハラスメントは、起こったことばかりに目が行きがちですが、それが起こり得る環境を改善し、被害を生まないことに意識を向けるべきです。そして、リスクについてスタッフが協議するリスクコミュニケーションがもっとも重要でしょう。ハラスメントは、同じ事柄でもその人



の経験・背景によって受け止め方が大きく変わります。ある人にとっては些細なことに思えても、別な人にとっては致命的な傷を与える場合があります。ですから、協議の場を作り、そこにアイヌのスタッフが高いレベルの参画をして、忖度せずに意見をすることが重要です。さらに、対策を講じた後は、それを組織の構成員に複数の手段で繰り返し周知すること、また対策が効果を発揮しているかどうかを定期的に評価し、必要に応じて修正することが必要です。『差別は思いやりでは解決しない』という本の著者、神谷悠一さんは、人権擁護の取り組みには「PDCA」、すなわち「Plan（計画）」「Do（実行）」「Check（評価）」「Action（改善）」が連携する事の重要性を指摘しています。同じことが、アイヌ関連施策にも求められるでしょう。

以上、私からは議論の下敷きとして、アイヌ文化と日本文化に関する取り扱いや意思決定における力関係の非対称性、安全に勤務することを脅かすリスクについてお話ししました。こうしたことはこれまでの事業でほとんど顧みられなかったか、有効な対策が打ち出されてきませんでした。タイトルに上げた「進化形文化事業」とは、早稲田大学の溝口彰子さんが提唱する進化形 BL という言葉から着想を得ています。溝口さんによれば、90 年代までのＢＬ作品は同性愛嫌悪がない世界、いわば「1 億総 BL」の世界を描いており、それは現実とは距離のある物語でした。2000 年代に入ると、作中でも同性愛嫌悪が描かれるようになり、登場人物も読者もそれに向き合うことになりました。つまりエンタメ作品としての在り方を保ちつつ、現実の問題に向き合う契機を含んでいるという意味で、これらは「進化形 BL」と呼ばれています。

これに照らしていえば、ウポポイのプログラムを含め、既存の文化事業の多くは、社会にあるアイヌへの差別やヘイトを完全に無視して設定されています。差別は「過去の事」としては書かれていても、現在に続く問題として語られていることは非常にまれです。ですから、まずは今日の偏見・差別を直視すること、それを言葉にすることが大切です。それによって、差別・偏見を乗り越える力を養うことにもつながる、いわば、進化形文化事業を構想することができるでしょう。

それでは、ここからパネリストの皆さんにご発言をお願いします。まずはナアカイさんからよろしいでしょうか。

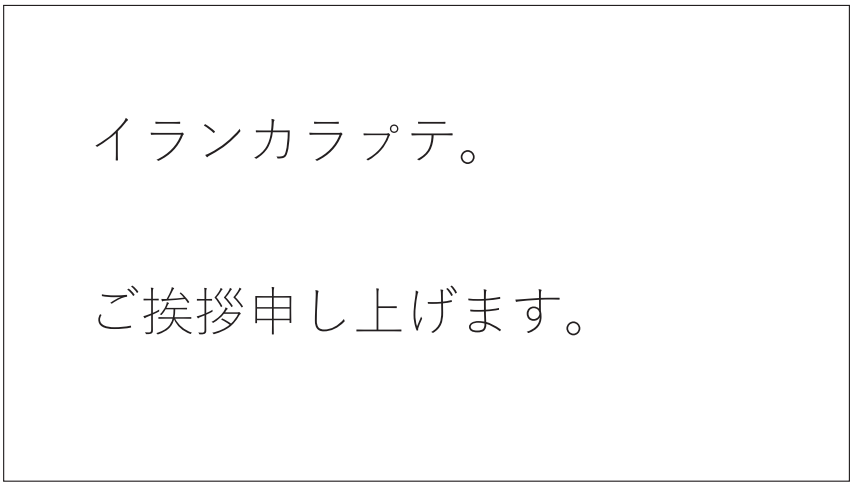
私がうけたマイクロアグレッションと今後への提案

Microaggressions I have Encountered and Some Suggestions for the Future

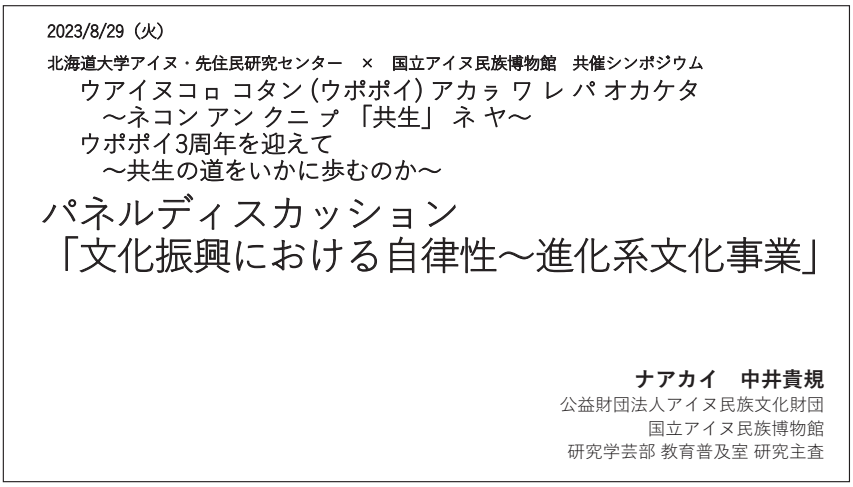
ナアカイ／中井貴規（Naakay/NAKAI Takanori）
国立アイヌ民族博物館　研究主査（Senior Fellow, National Ainu Museum）

【スライド 1 】
イランカラプテ。
チカプニ コタン タ
クシゃオ ワ クスクプ。
タネ 白老 コタン タ クアン ワ
ウアイヌコロ コタン オッタ クモンライケ。
ナアカイ、中井貴規 セコロ アン ペ
クネ ルウェ ネ。

ご挨拶申し上げます。
（旭川の）近文で
私は生まれ育ちました。
今は白老に住んでいて
民族共生象徴空間で働いています。
ナアカイ、中井貴規と名がある者が
私でありますよ。



【スライド 1】



【スライド 2】

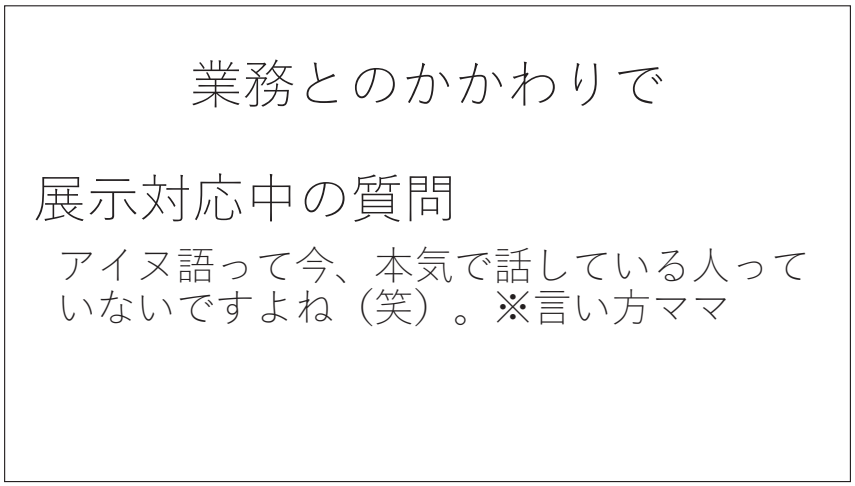
【スライド2】

このパネルディスカッション「文化振興における自律性～進化系文化事業」において、まずは、私が体験したマイクロアグレッションの事例を述べつつ、次の発表者につながるような内容を述べることができればと考えています。

【スライド3】

まずは私自身の体験です。マイクロアグレッションのなかから私にとって一番印象的な事例を話します。私が展示対応中にうけた来館者からの質問です。

展示対応というのは、研究員・学芸員・アソシエイトフェロー・エデュケーターといった職員が、100分間、おもに基本展示室に立って来館者へのレファレンス対応等を行うものです。定期的に担当する業務で、勤務シフト等の兼ね合いもありますが、私の場合は、月に1～3回の頻度です。

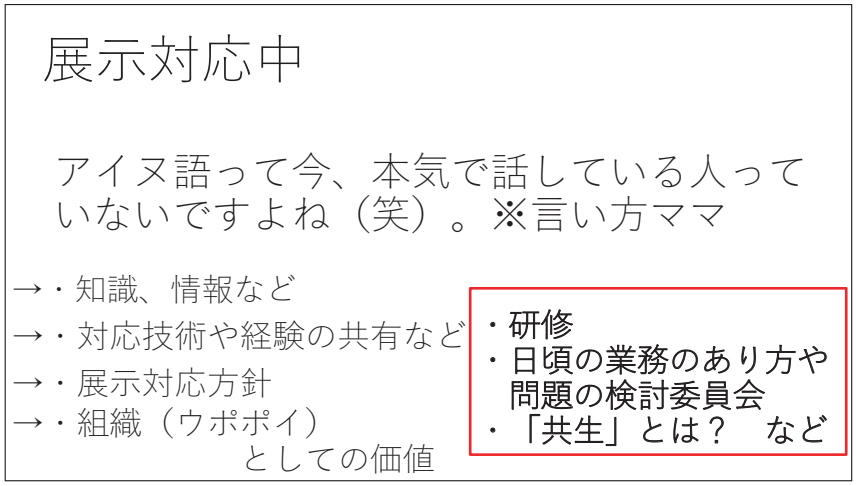


【スライド3】

質問された内容は「アイヌ語って今、本気で話している人っていないですよね（笑）」というものです。笑いながら言われました。「本気で話す」「今、」「～いないですよね（＝いないことが前提）」という言葉について、相手が意識的にしているかどうかは外見からは定かではないですが、意識的・攻撃的な表現と感じます。もし、無意識だとしても、他者の民族的出自や文化の価値、ここではアイヌ語の価値を貶めている行為と感じます。

国立アイヌ民族博物館は「国内外のアイヌの歴史・文化に関する正しい認識と理解を促進する」ということを理念の一つとして掲げていますから[1)]、こうした質問に、イライラ・モヤモヤを抱えながらも、業務なので対応をしなければなりません。イライラ・モヤモヤを抱える理由は、ここ約10～15年、私の興味・関心はアイヌ語―とくに生まれ故郷の旭川のアイヌ語、アイヌ文化にあるからです。自分なりに学んでいたり、事業や活動に携わっていたりする、私の大事な部分です。それに対する攻撃と私は感じるわけです。「今、本気で話すって何だろう？」とイライラ・モヤモヤを感じつつ、まず、基本展示室「イタㇰ　私たちのことば」展示[2)]にある映像「アイヌ語の復興とこれから」を観ていただきました。ここでは、萱野茂さん[3)]が国会においてアイヌ語で話した場面や今のアイヌ語の取り組みが紹介されています。次に、動画を観ていただくことに加えて、地名や商品名など身近にもアイヌ語があることや、手紙やメールやラインなどにおいてアイヌ語でやりとりしたり、短くてもアイヌ語で会話したりする方もいる、などの事例紹介・説明をしました。今も日本各地・世界各地にアイヌはいて、アイヌ語はユネスコによって消滅の危機にある言語とされてはいるが、もちろん絶滅したわけではなく、アイヌ語を本気で話している・話そうとしている人がいるんですよ、というアイヌ語に対する理解が深まる・広まることを伝えました。

この来館者は納得して、帰りました。それで少しは救われましたが、イライラ・モヤモヤの全てが消えたわけではなく、やはり心に残ります。それが蓄積していくと、ある日ふとしたはずみで爆発してしまったり、身体や心が壊れたりしていきます。



【スライド 4】

【スライド 4】

こういった展示対応の事例から、私なりに必要なものは何かと思いつくものをあげていきます。

①質問等に答えられるだけの知識や情報など（対応に直接的に関係）です。今回の事例においては、アイヌ語は確かに危機言語ではあるが、もちろん消滅したわけではなく、今たしかにアイヌ語復興の動きがあり行われている。この展示コーナーに答えがある、などという知識・情報です。

②対応経験の共有など（準備・用意の類）です。例えば、質問と対応の事例集をまとめて共有しておく、よく出る事例は共有してまとめておく、怒りを感じているときほど感情労働をして冷静に話すということが必要だ、過去にこういう対応した・対応をしたら失敗してしまった、などが考えられます。まだまだ私も経験を積んでいる最中です。

③博物館としての展示対応方針も必要です。展示対応をするにあたって必要な内容・対応方法を学ぶ研修を経てから実際に展示対応をしてもらう、自分なりに対応して分からない部分が出てきたら専門の者を呼ぶ、明らかに攻撃的な内容に対しては対応する前に上長を呼ぶ、危ない（身の危険、自身の感情の爆発など）と感じたときにはその場を離れる・緊急当番に連絡する・上長を呼ぶ、などの体制・対応をあらかじめ決めて職員全員に伝えてから、展示対応に臨むというのが大事だと思います。

④最後に展示対応の場面に直接的にはつながらないのですが、一番大事だと私が考えるのは組織（ウポポイ）としての価値観は何かを決めておくことです。ここは、ウアイヌコロ コタン / 民族共生象徴空間ですが、「共生」とは何か？「共生」とはどういうことか？　民族共生象徴空間の存在意義とは何か？　などを、まずは我々職員が考えて議論して、定めるというのが大事だと考えます。

パネルディスカッションのタイトルにもあるような自律して動くということは、規範、根っこの部分を決めておくということだと思います。規範がないと、自ら考えて、行動するというのはなかなか難しいです。このためにも、研修とか検討委員会とか、職員が「共生とは何か？」を考えて議論するような場を設けて、検討し定めていくというのが大事だろうと考えます。我々が全くこれらのことを行わずに日々の業務にあたっているというわけではないので、誤解はしないでください。必ずしも十分ではないですが、一部行っていたりするものもあるし、行おうとしているものもあります。

「ウアイヌコロ コタン民族共生象徴空間における共生とは何だろう？」「どうなったら成功なのだろう？」「目指す姿は何？」ということを考えて、議論・検討する職員向けのワークショップを行って、継続していくのがよいと私自身は考えます。

パクノ クイェ ナ。
ここまで言いましたよ。

イヤイライケレ。
感謝申し上げます。

【スライド 5】

【スライド 5】

そのようなわけで、私自身の体験事例の報告と、研修・検討委員会、職員が「共生とは？」などを考えて議論するような場を設けて続けていくというのが必要であろう、という提案でした。パクノ クイェ ナ（以上です）。イヤイライケレ（感謝申し上げます）。

注

1）国立アイヌ民族博物館 web サイト「博物館について」にある「館長からのご挨拶」に国立アイヌ民族博物館の理念について、「国立アイヌ民族博物館はそのウポポイの中核施設として、「先住民族であるアイヌの尊厳を尊重し、国内外のアイヌの歴史・文化に関する正しい認識と理解を促進するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」という理念を掲げ、＜以下略＞」と記載。
https://nam.go.jp/about/（2023 年 10 月 21 日閲覧）

2）アイヌ語や物語、地名や現在の取り組みを紹介。国立アイヌ民族博物館の基本展示室については、当博物館 web サイト「イコロ トゥンプ基本展示室 / ２F」を参照。
https://nam.go.jp/exhibition/floor2/basic/（2023 年 10 月 21 日閲覧）

３）1926 ～ 2006 年。今の北海道沙流郡平取町二風谷に生まれる。アイヌ語とアイヌ文化の記録・解説・著述・紹介などに多大な業績を残す。アイヌ民族文化財団 web サイトも参照のこと。
https://www.ff-ainu.or.jp/web/overview/business/details/1577.html（2023 年 10 月 21 日閲覧）

開業から３年間における取り組みについて

Initiatives Over the Last 3 Years Since Opening

ムカラ／山道陽輪（Mukar/YAMAMICHI Yomaru）
民族共生象徴空間運営本部　主任（UPOPOY National Ainu Museum and Park, Team Leader）

みなさま、イランカラプテ。民族共生象徴空間運営本部　文化振興部　体験教育課の山道と申します。

本日はよろしくお願いいたします。

まず、はじめに私の自己紹介として、ここウアイヌコロ コタン、通称ウポポイでどのような仕事をしているのか紹介させていただきます。

【ウポポイ全体図】

こちらがウポポイの全体図です。中心となる国立アイヌ民族博物館を中心に４つの施設と場所があり、私はその中の「イカラ ウシ　工房」という場所で普段は働いています。

【実演風景】

ここでは刺繍や木彫の体験ができるほか、私たち職員が制作している姿を見学したり、製作物や素材に触れたりすることができます。

【丸木舟実演風景】

また、湖畔では丸木舟に乗り、舟の紹介や実演も行っています。

こちらは国立アイヌ民族博物館のメイン展示の一つになります樺太アイヌがクマ送り儀礼に使用するクマを繋ぐ杭とクマの装飾です。この資料には現在では使用されていない技法や素材が使用されておりましたが、調査研究により制作技術の復元ができたウポポイの成果の一つといえます。このように来場者向けの体験プログラムとしてアイヌ文化を発信するだけではなく、資料の所在調査や実施調査、素材の採取と加工、実験的な制作による技術の復元などにより、現代に伝えられていない技術を掘り起こすことで物質文化の豊かさや奥行、アイヌの歴史を明らかにすることもウポポイの持つ大事な役割として行われております。

ウポポイは「アイヌ文化の復興・創造等の拠点」という役割を持った施設です。もちろん来園者へアイヌ文化を発信することは大事なことですが、その前に復興という大事な役

【クマつなぎ杭】

割があることも忘れてはいけません。どんな文化も伝承しなければ途絶えてしまいますし、研究することで新たな知識を身に着け、新しいことを伝えることができるようになります。日々新たなプログラムの検討や振り返りを行い、アイヌ文化の発信や文化の伝承を行うことを業務として行っています。

しかし、業務には様々な問題や課題も出てきます。例えば、発信の方向性など課題があっても、それを話し合う場がないため、業務に反映ができない。調査研究を行うための時間を確保できないなど様々です。そのためには職員が意見を交わし、こうした課題を解決することができる場を設置する必要があると考えます。

私が所属している文化振興部という部署ではプログラム委員会、広報連携委員会、儀礼委員会という三つの委員会を設置し、職員が主体となって検討する場が設けられています。現在取り組まれている事例として各種委員会の取り組みを紹介させていただきます。

まず初年度に発足したのがプログラム委員会です。昨年度からは広報連携委員会と儀礼委員会が発足しました。プログラム委員会では四つの項目を中心に検討を行っています。

1つ目が「タイムテーブルパンフレットについて」です。現在、タイムテーブル上でのプログラム数は23種類あります。これだけの数のプログラムをどのように見やすくするのか、また、23種類の中で来園者へおすすめしたいプログラムをどのように伝えるのか、デザインやプログラム間の導線、プログラム時間などについて検討し、提案するということを行っています。現在は広報連携委員会が主体となって検討を続けています。

2つ目が「イベントの企画・提案」です。1年目は個々のチームで特別プログラムを企画するという形式でしたが、2年目からはテーマを設け、テーマに沿ったプログラムを各チームに提案してもらい、皆で協力しあってイベントとしてプログラムを行うことを検討・提案してきました。

3つ目が「新プログラムの検討方法」です。組織内での情報共有やそのプロセスなどの整理、プログラムの要項書や振り返りシートのひな型を作成し、統一した形式で情報をまとめ、プログラムを検討できるよう下地を作りました。

4つ目が「プログラム全体構成の見直し・企画」です。将来的なビジョンを検討し、プログラムの在り方などについて検討しています。例えばアイヌが1年を通して行う生業をカレンダーに落とし込み、それを元にプログラムを検討し、1年を通してアイヌの季節感を感じながら文化を学べる環境を目指すことや、チセや舟の制作のように長期的な伝承活動について、どのように制作と公開をするのかなど、長期的な検討を行っています。

次に広報連携委員会ですが、この委員会では3つの項目を中心に検討を行っています。

1つ目が「町民向け広報の在り方」です。ここ白老町の町民の方々にウポポイの取り組みをいかに周知するかを検討しています。現在は町民向けの広報誌にウポポイのページを設けていただき、月ごとにイベント情報や施設ごとの見どころなどを発信しています。地元に愛される施設を目指すことも大事なことです。

2つ目に「計画性のある広報体制の確立」です。SNSの活用などについて見直しています。内部での確認から発信までの体制整備や最適なメディアの選択や発信方法の検討などを行っています。

3つ目は「正確な情報発信に向けた体制作り」です。広報物やメディアに正確な情報を発信できるよう、アイヌ語のチェックなど、円滑に正確な情報を発信できる体制作りについて検討しています。

最後に儀礼委員会です。儀礼委員会では以下の4つの項目を主に取り扱っております。

1つ目が「ウポポイにおける儀礼の在り方について」です。現在は旧アイヌ民族博物館で行っていた形式に則って儀礼を行っていますが、ここはいろいろな地域から集まった職員がいますし、アイヌ文化も地域の特色や言葉も方言がありますので、形式は今のまま行うのか、いろいろな地域の形式も執り行うべきなのかなど、ウポポイとしての儀礼の在り方を検討しています。

2つ目が「研修について」です。職員がカムイノミについて基礎的なことから、作法などを事前に勉強する場を作っています。それから、祭具の制作なども休園日を利用し、なるべく多くの職員が関われるよう調整をしています。また、職員からの意見や質問を受け、どのような研修が必要となるのか検討をしながら研修のセッティングなども行っています。例えば、儀礼に参列する心構えや儀礼への向き合い方について先輩方から教えていただく研修も行いました。

3つ目が「実施と報告書の作成」です。現在はコタンノミという旧アイヌ民族博物館から続けている大き

な儀礼を中心に実施し、報告書の作成までを委員会のメンバーを中心に行っています。

４つ目が「儀礼の公開について」です。儀礼をどのように公開するのかも大事な検討課題として取り扱っています。どこまでを公開するべきなのか、どのように公開すべきなのか様々な視点から検討を行っています。

現在は月のはじめに行う儀礼のみ公開をしています。儀礼を初めて見る来園者にも理解していただけるよう司会や配布物の検討などを行っています。そのほか、儀礼の準備として供物を作る姿なども公開するようにしてきました。月はじめの儀礼については来園者の皆さまにもご覧いただくことが可能です。

以上、簡単ではありましたが現状の取り組みとして紹介させていただきました。

現在はプログラムや広報、儀礼に関しての委員会ではありますが、委員会という場を設置することで様々な問題に向き合うことができると思います。

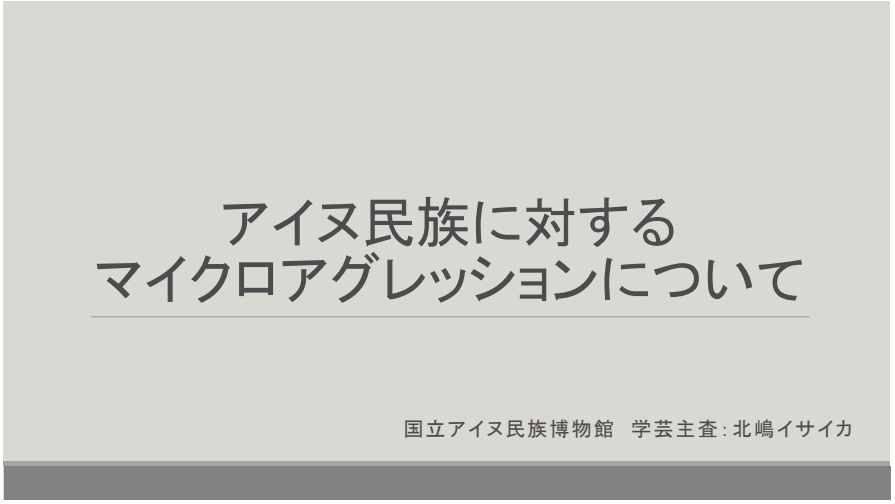
ウポポイには様々なレファレンスやヘイトなどの問題に直面することも少なくありません。そのような様々なリスクに対して向き合い、検討するリスク委員会のような場があっても良いと思います。最後に提案とさせていただきまして、私の話を終わります。

ご清聴ありがとうございました。イヤイライケレ。

アイヌ民族に対するマイクロアグレッションについて

Concerning Microaggressions Against the Ainu People

北嶋イサイカ（KITAJIMA Isayka）
国立アイヌ民族博物館　学芸主査　（National Ainu Museum, Senior Fellow）



【スライド 1】

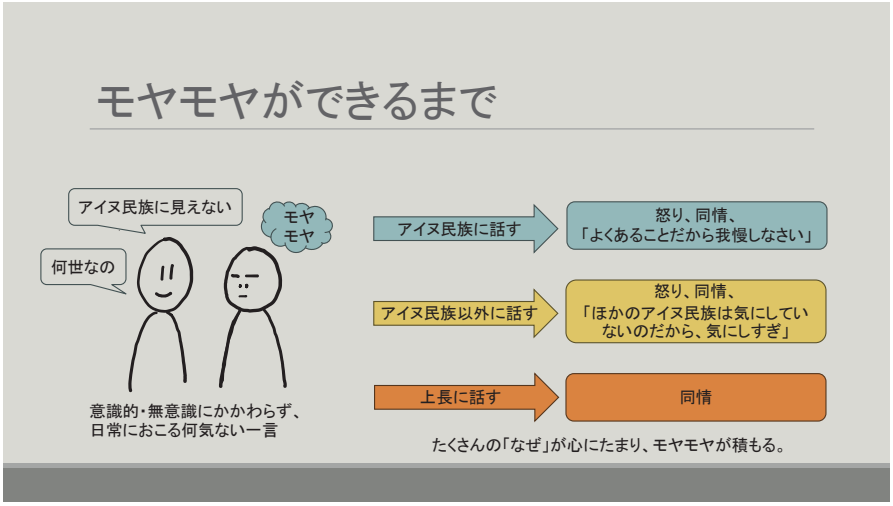
アイヌ民族に対するマイクロアグレッションについてお話しします。国立アイヌ民族博物館　学芸員の北嶋イサイカです。よろしくお願いします。

国立アイヌ民族博物館や以前の職場、札幌大学ウレシパクラブでの活動、刺しゅうなどの講習会で体験したマイクロアグレッションについて、北海道大学の『アイヌ・先住民研究　第３号』に投稿しました。この冊子には、北原モコットゥナシ先生や杉本リ

【スライド 2】

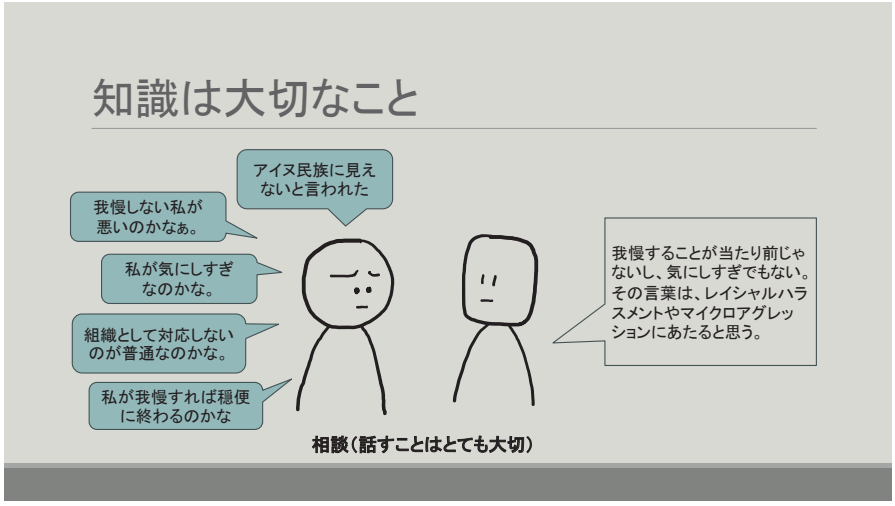
ウさんもアイヌ民族に対するマイクロアグレッションについて執筆しています。この URL（https://doi.org/10.14943/Jais.3.035）に全文掲載されていますので、興味のある方はアクセスしていただければと思います。

私が執筆した内容は、先ほど言いました国立アイヌ民族博物館や技術講習会などの学習施設で、私が体験したマイクロアグレッションについての事例とその発言がどのようなマイクロアグレッションにあたるのかについて説明しました。



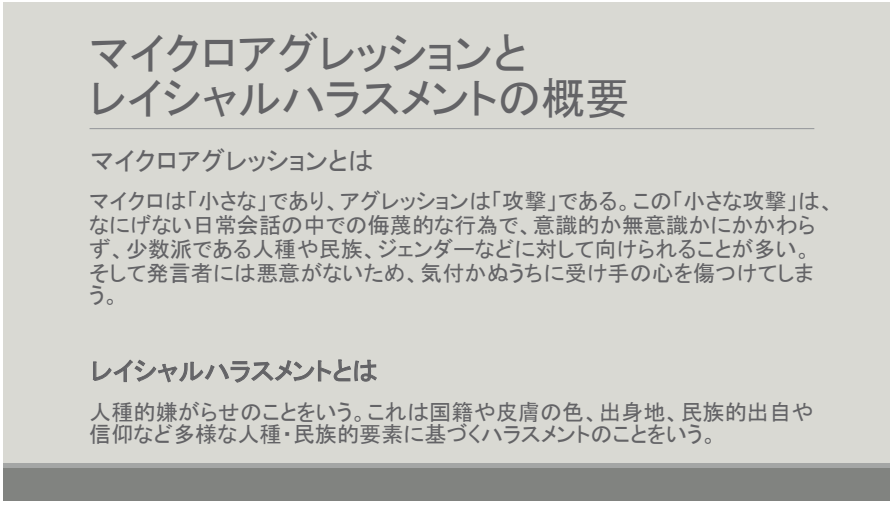
【スライド 3】

当館の基本展示室で展示対応をしていると、「アイヌ民族に見えない」や「何世なの」という、意識的や無意識にかかわらない何気ない一言を言われ、モヤモヤした気持ちが残ります。「アイヌ民族に見えない」という発言に傷つき、アイヌ民族にこのことを話すと、それを聞いて怒る人や同情する人、「よくあることだから我慢しなさい」という人がいます。アイヌ民族以外に話しをすると怒る人や同情する人、「ほかのアイヌ民族は気にしていないのだから気にしすぎだよ」という人がいます。上司に話をすると「大変だったね」と同情されます。民族性を否定され傷ついているのに、アイヌ民族から「我慢しなさい」といわれるのはなぜだろう。この傷つく言葉を「よくあること」と当然のように受け入れるのはなぜだろう。アイヌ民族以外の人が、「ほかのアイヌ民族は気にしていない」とか「気にしすぎ」とか言うのはなぜなんだろう。ハラスメントを受けているのに、上長はなぜ同情するだけなんだろう。このようなたくさんの「なぜ」で心の中がモヤモヤでいっぱいになりました。



【スライド4】

「アイヌ民族に見えない」と言われモヤモヤしたことや「我慢しない私が悪いのか」「私が気にしすぎなのか」「組織として対応しないのが普通なのか」「私が我慢すれば穏便におわるのか」など知人に相談しました。そうすると「我慢することが当たり前じゃないし、気にしすぎでもない。その言葉は、レイシャルハラスメントやマイクロアグレッションにあたると思う」と言われました。ハラスメントについて話をしたり、本を紹介してもらい読むことで、自分のモヤモヤしている気持ちがハラスメントからきているとわかりました。今までは我慢するのが当たり前だったため、それに「不満を持つこと自体がおかしい」とか、こういう制度的なものは「上司や行政が考えるもの」だと決めつけていました。ですが、アイヌ民族に対するマイクロアグレッションは当事者しか分らないことだと気づき、発言した方がいいのではないかと考えました。過去の私は、ハラスメントの知識がないため、こんなことにさえ気づけませんでした。



【スライド5】

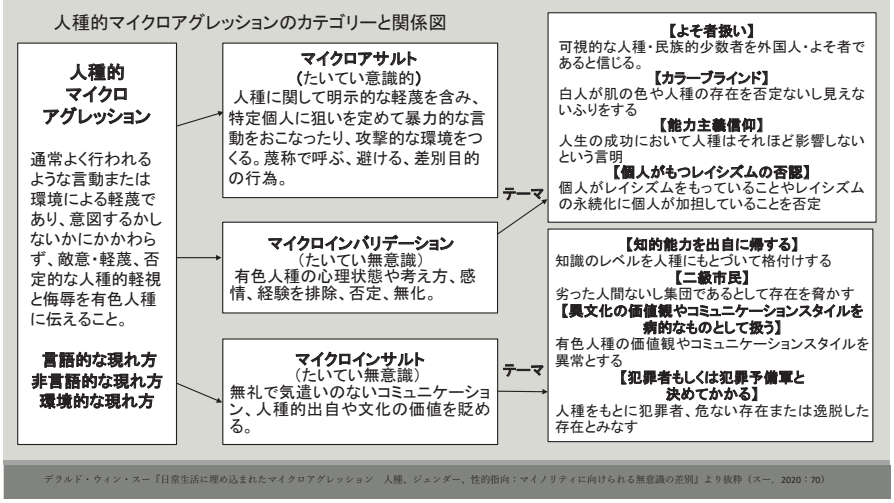
＜マイクロアグレッションとは＞

マイクロは「小さな」であり、アグレッションは「攻撃」です。この「小さな攻撃」は、なにげない日常会話の中での侮蔑的な行為で、意識的か無意識かにかかわらず、少数派である人種や民族、ジェンダーなどに対して向けられることが多くあります。そして発言者には悪意がないため、気付かぬうちに受け手の心を傷つけるというものです。

展示対応の時間などに、何気ない一言を話す人は複数いても受け手は一人なので、何度もマイクロアグレッションを受けます。これが何か月も続くとストレスがたまり、病気になる可能性があります。

＜レイシャルハラスメントとは＞

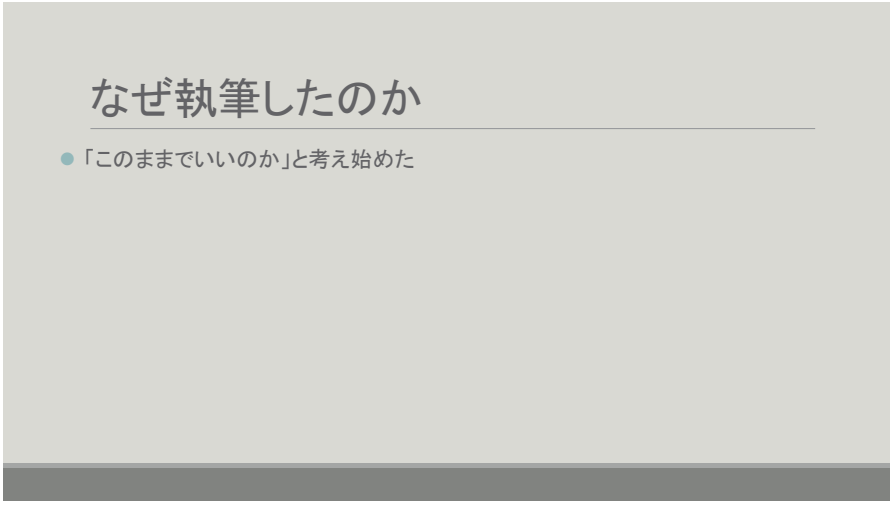
人種的嫌がらせのことをいいます。これは国籍や皮膚の色、出身地、民族的出自や信仰など多様な人種・民族的要素に基づくハラスメントのことです。



【スライド 6】

この表は、デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション　人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（2020 年、明石書店）より抜粋したものです。マイクロアグレッションは 3 つのタイプに分けることができるという表です。自身が受けたマイクロアグレッションを理解するのに役立つと思いますので、詳しくは『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』か『アイヌ・先住民研究　第 3 号』をご覧ください。

この表についてはアイヌ民族のことを書いたものではないので、自身が受けたマイクロアグレッションを区分するのが困難な場合があります。今後アイヌ民族に対するマイクロアグレッションの研究が進むことを願っています。



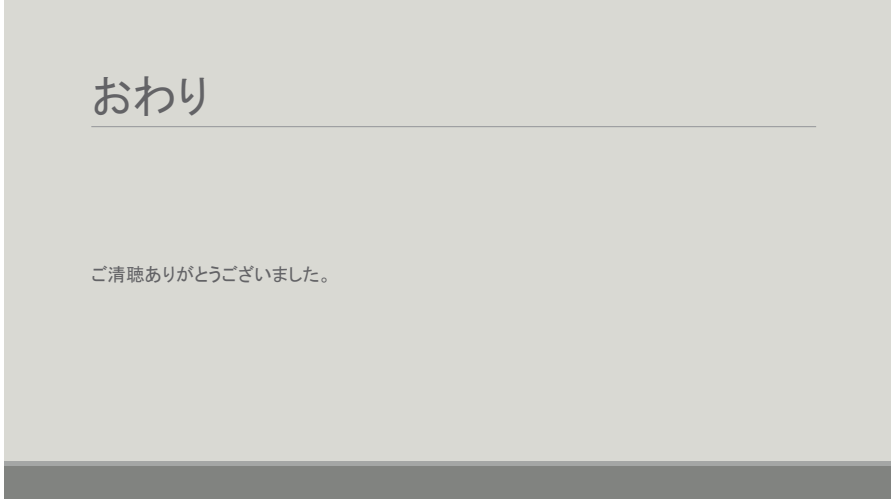
【スライド 7】

マイクロアグレッションについて執筆した理由は、先ほどのスライドで話した「なぜ」がたくさん溜まっていき、マイクロアグレッションのある現状を続けていいのか、現状を受け入れ我慢し「なぜ」を後輩へ引き継ぐことは正しいことなのか考えたからです。

また、「以前のようなあからさまな差別」が少ない社会になってきたのは、先人たちが「差別を子供たちに残さない」と決めて、活動してくれたからだと考えています。我慢することで面倒ごとは避けられますが、先人たちは、たとえ面倒なことになったとしても、子

供たちのために頑張ったのではないかと考えました。

民族共生象徴空間で働いているのに、マイクロアグレッションのある状態のままでいいのかと考えました。いろいろと考えた結果、「このまま」でいいとは思えず、執筆をすることにしました。この冊子を読んだ人が私の書いた内容に賛同する・しないに関わらず、マイクロアグレッションについて誰かと話すきっかけになればと思います。



【スライド8】

マイクロアグレッションで傷ついているアイヌ民族は、私だけではないと思います。知識がないとマイクロアグレッションを受けた時の気持ちを視覚化するのは難しいです。カウンセリングや知人へ相談し、モヤモヤを整理することにより、自分の状況や原因がわかり、モヤモヤの解消につながると考えます。そして、マイクロアグレッションなどの発言者も無意識の発言のため、なぜアイヌ民族が傷ついているのかわからず、発言した人さえも傷ついているように感じます。この悪循環を少しでも解消するためには、アイヌ民族がマイクロアグレッションと受け止める発言と気持ちを知ってもらうことが重要だと考えます。そして、私もアイヌ民族以外の人たちにマイクロアグレッションをしていないか考える必要があります。相手の考えを全て理解するのは不可能なため、対話や聞き取り調査などにより実態を知ることが必要です。この実態を調査し、民族共生の道を切り開く役目をウポポイは担っているのだと考えます。

ウポポイでは、各地のアイヌ文化を継承する若手が働いています。結果的に各地の文化伝承活動を担う若者が減少していますが、ウポポイを退職した後に、ここで学んだことを地元に還元できると考えます。ウポポイは、一般来館者にアイヌ文化を知ってもらう場所であり、アイヌ民族の文化伝承の場所でもあると思います。これまでの博物館には、文化伝承者であり研究者という立場で働いている人がいたのでしょうか。もしかすると新しい働き方がこの職場で生まれたのかもしれません。研究だけじゃなく「モノづくり」や「うたや踊り」などを実際に行う、文化伝承についても考慮してほしいです。そうでなければ、文化伝承に対する誇りが削られていくので、民族共生象徴空間で働くことをあきらめるアイヌ民族が出る可能性があります。そのような環境にならないことを希望します。

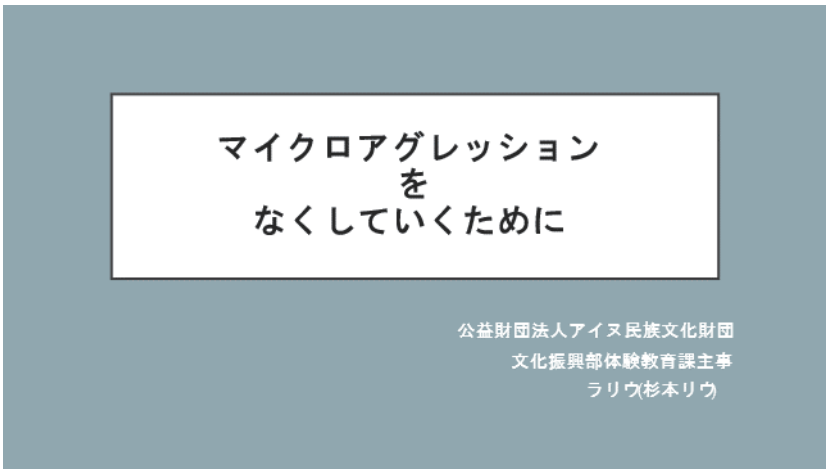
以上で私の発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

マイクロアグレッションをなくしていくために

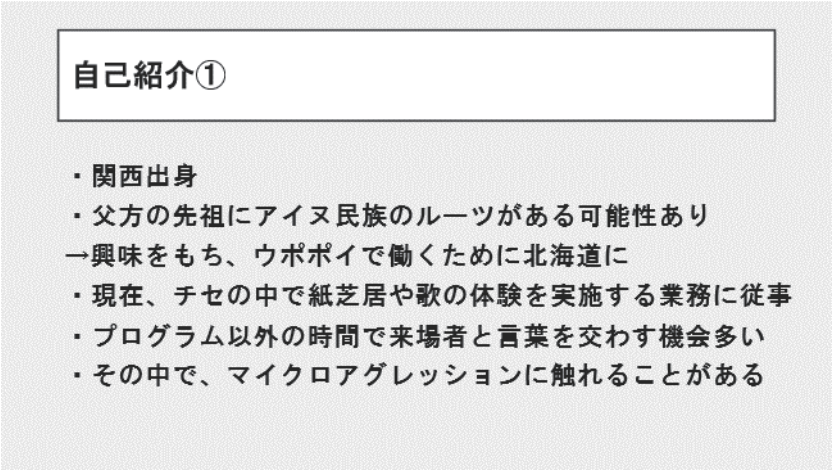
In Order to Eliminate Microaggressions

ラリウ／杉本リウ（Rariw/SUGIMOTO Riu）
民族共生象徴空間運営本部　主事
（UPOPOY National Ainu Museum and Park, Cultural Programs）



【スライド 1】

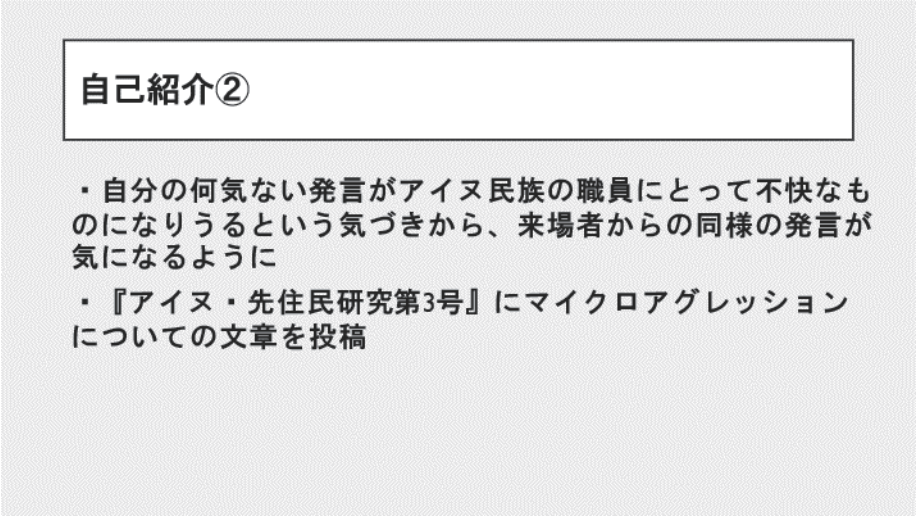
みなさんこんにちは。
「マイクロアグレッションをなくしていくために」というテーマでお話しさせていただきます。文化振興部体験教育課の杉本リウと申します。ウポポイに来てから、ラリウというアイヌ語の名前をつけてもらいました。よろしくお願いします。



【スライド 2】

最初に少し自己紹介をさせてください。わたしは関西で生まれ育ちましたが、父方の先祖にアイヌ民族がいる可能性がある、という話を小学生くらいの時に聞いてから、それをきっかけにアイヌ民族やアイヌ文化に興味を持ち、ウポポイで働くために、4 年前に北海道に来ました。わたしのルーツは現在戸籍を調べている途中でまだわからないのですが、和人としてのアイデンティティをもっています。今日はそんなわたしの立場からお話しさせていただきます。先ほどイサイカさんもマイクロアグレッションについてお話しされていて、重なる部分もありますが、わたしの和人としての立場からお話しさせていただきたいと思います。

わたしは現在、チセの中で紙芝居や歌の体験を実施する業務をしています。プログラム以外の時間でも来場者と言葉を交わすことが多く、その中でマイクロアグレッションや、もっとひどいヘイトのようなものに接することがあります。



【スライド３】

わたしはウポポイに来て初めて、アイヌ民族であることを公言して働いている多くの人たちと出会いました。いっしょに働き、たくさんのことを教えていただいて、その中で自分がアイヌ民族としてどう考えるかとかどう社会を見ているか、そういった心情を話してくれる人がいて、もちろんアイヌ民族といっても色んな考えの人がいますが、わたしの立場とアイヌ民族の立場で、同じ事柄でも見方や感じ方が違うことがあることに気づきました。その中で、わたしの立場からこれを言うと失礼だなとか、言ってはいけなかったなと気づくことが多々ありました。自分に悪意がなくても、民族性が違う人にとっては不快に感じる言葉があることを知りました。これが、マイクロアグレッションです。恥ずかしいですが、わたしもマイクロアグレッションをしていました。そのことに気づいてから、自分の言動に気をつけるようになると、今度はそういう言葉が来場者からもたくさんあることが気になり始めました。

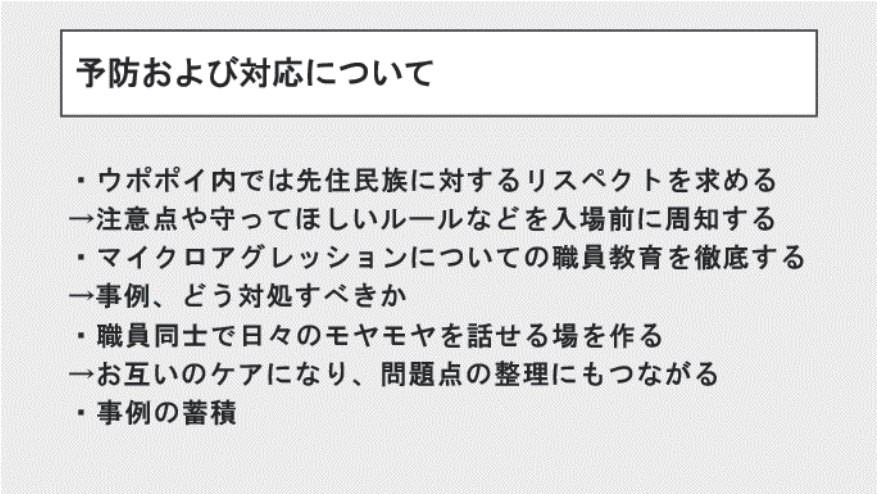
わたしはウポポイで働く中で、アイヌ文化についてだけではなく、社会人としてもたくさんの人に教えてもらい、育ててもらいました。感謝して尊敬している、たくさんの人たちがいます。そのような大切な人たちに向かって、失礼なことを言わないようにするために自分も勉強して気をつけないといけないと思うと同時に、来場者にもそういう発言をしないでほしいと思うようになりました。そこから、マイクロアグレッションを無くしたいと考えるようになりました。

わたしも最初はマイクロアグレッションをしていたし、そんな和人であるわたしの立場から言えることはあるのか、「和人がアイヌの声を代弁できると思っているのか」と不快に思う人はいないか、と不安もありましたが、アイヌ民族から和人に向かってマイクロアグレッションや差別をやめてくださいと言うだけじゃなくて、和人から和人に言えることもあると思うので、違う立場の人がどう感じ考えるかを想像することを促すことはわたしにもできると思い、先ほどイサイカさんがお話しされた『アイヌ・先住民研究』第３号に、ウポポイでのマイクロアグレッションについての文章を書かせていただきました。

その文章を書く中で、なぜマイクロアグレッションが起きるのか、その背景を考えることはわたし自身がもっている和人としての無意識の偏見と向き合うことでもあり、反省することばかりの過酷な作業でしたが、すごく必要な時間だったと思いますし、今後もっと深めていかなければいけないことだと思います。

このようなマイクロアグレッションをなくしていくために、できることがたくさんあると思います。大きく４つあげたのですが、

１つめ、ウポポイ内では先住民族に対するリスペクトを求めるということです。ニュージーランドのマオリについての施設では、ハカという踊りのパフォーマンスの前に、パフォーマンス中に笑ったり話したりし



【スライド 4】

ないように、という注意のアナウンスをしています。ウポポイでもこのように先住民族やその文化に対するリスペクトを言葉にして求めるべきだと思います。そのひとつのかたちとして、例えば配慮の無い写真・動画撮影の禁止や、配慮の無い質問や言葉の投げかけの禁止などをルールとして明示するとわかりやすいと思います。わかりやすく目に見える形で入園前に提示しておくと、この施設はリスペクトが必要な場所なんだ、ということが理解しやすいと思います。そして、このお互いにリスペクトをもって配慮するということはもちろん、ウポポイやアイヌ民族に限ったことではなく、社会全体で必要なことです。ウポポイから始めて、広げていきたいです。

2つめは、最初のナアカイさんのお話ともつながるのですが、マイクロアグレッションについての職員教育を徹底することです。現在はマイクロアグレッションへの対応の仕方は職員個々人にゆだねられていて、正解がない中で対応できる人もいればできない人もいる状況です。長くお客さんに対してアイヌ民族やアイヌ文化についてお話しするお仕事をされている人は慣れていて、パッと適切な対応ができる人もいますが、もちろんすごくショックを受けてしまって対応できない人もいると思います。また、わたしみたいにウポポイに来て初めてアイヌ民族やアイヌ文化について深く勉強した、という人は何がマイクロアグレッションかも認識できないこともありますし、それにどう対応していいかわからないこともあります。そういう正解がわからない中で、手探りで対応している職員は多いです。何がマイクロアグレッションに当たるかを職員で共有し、それを放置していては偏見は無くならないこと、無くせるという共通認識や目標をもつこと。職員が正しく対処することで、自分の認識や発言が間違っていたと気づいてくれる来場者が増え、アイヌ民族への偏見をウポポイで断ち切ることができると考えます。

そして3つめは、職員教育とも重なる部分がありますが、マイクロアグレッションについて職員同士でもっと話せる場が必要だと思います。これは個人の感情に関わることですごく難しい部分もあるので、その場でのテーマやメンバーの限定、設定などの配慮が必要ですが、安心して話せる場所をつくることが必要です。話すことがお互いのケアになり、成功体験や失敗体験を共有することで解決策や改善策が見つかると思います。

そしてその事例を蓄積させることが必要です。4つめは事例の蓄積です。事例を蓄積させることで対応策がより豊富になり、よりよい対処につながります。

以上が、ウポポイでのマイクロアグレッションについてわたしが問題意識を抱いた経緯・背景と、無くしていくためにできるとわたしが考えることについてのお話です。この発表が、ウポポイ全体でマイクロアグレッションについて考えることにつながったら、とても嬉しいです。そして、ウポポイから社会全体につなげていきたいです。もっともっとみなさんと一緒に考えたいです。

聞いていただいてありがとうございました。

ディスカッション　Panel Discussion

モコットゥナシ：ナアカイさんのご発表で紹介されていた来場者からの言葉ですね。この「アイヌ語って今、本気で話している人っていないですよね（笑)」っていう発言は、おそらく、「え？何がこれひどいの？ なんで傷つくの？」っていうことが分からない方もいらっしゃるんじゃないかっていうふうに思うんですね。私からすれば失礼だなっていうふうに感じられるんだけれども、こういうときに、これがアイヌ側にとってはどういうふうに受け止められるか、あるいは発言者が意図していなくても（発言が）どういう意味を持ってしまうか、メッセージを持ってしまうかということを補っていくのが一つの対応になるのかなと感じます。例えば、「本気で話してる人いないですよね？」というのは、少し言葉を補えば、「アイヌ語ってもう終わってますよね。わざわざ展示したり、復興をうたったりする意味がないですよね」という意味を持ってしまう、少なくとも相手にはそういうものと受け取られる可能性がある。

これから頑張っていきたいと言っている人々に対して水をぶっかけるような、しかも、この発言者が和民族であるとすれば、そのアイヌ語の状況をつくってきたっていう社会の一部である立場から、随分遠い他人事のような物言いであるということに、恐らくモヤモヤを感じるんではないかというふうに思います。

こういうふうに、言葉というものは、発した内容だけではなくて、（言葉を）聞く側・発する側が持っている歴史が、そこにどうしても乗っかってきてしまうということが教育の中で伝えられる必要があるんじゃないか。

ナアカイさんは非常に朗らかな人だと私は思っているんですけれども、でもナアカイさん自身も普段はもしかしたら意識しないようなアイヌ語や文化を失ってきたそういう喪失の感覚とか、親族とか先祖への思いというものがあるんだろうなというふうに私は感じます。ですから、アイヌがアイヌとして働くってことは、そういうものを背負っていることもあるんだと、アイヌが全員いつもうつむいて暮らしてますとか、泣きながら暮らしてますなんていうふうに思ってもらう必要はないんだけれども、今の日本の中で発言をし、相手に受け止められるっていうことは、そういう加害と被害の歴史っていうものを負っていってるんだということが、伝えられる必要があるんじゃないかというふうに思います。

ナアカイさんの発表の中では、事例の蓄積ということが一つ提案としてありました。それが職員研修にもなるということなんですけれども、このときにですね、特に応対するときに「あなたの何気ない一言で今自分は傷ついたんだ」ということをいかに的確に伝えられるか、それを短くですね。納得してもらえるような形で表現できるかっていうことが、応対を磨いていく上でのポイントになるんじゃないか…私もこういう話をしてると感情的になってしまうことがあるんですけど、泣きたくなるような気持ちってのは決して我慢する必要はない。泣いてしまったらそこで破綻してしまうので抑えようとしてしまいがちですが、自分の自然な感情を抑えながら、そういう相手に付き合い続けるっていう必要もないわけですよね。

なので、例えば私のようないい年したおっさんであっても、傷つくんだよっていうことは、やっぱり伝えなきゃいけないんだなというふうに感じることが多い。それから上長という言葉はあまり耳慣れないかもしれないですが、要は上司ですよね。仲間とか上司を呼ぶ必要があるんじゃないかっていう時に、上司に例えばどう対応してほしいのかについてナアカイさんのお考えを聞ければというふうに思います。

ナアカイ：ありがとうございました。上長（上司）を呼んだ後、どういうふうに対応してほしいか（を述べる)、という理解でいいですよね。

私自身で解決できるとか、その職員自身で解決できるという時には、多分上長は呼ばれないと思いますので、モコットゥナシ先生が言って

くれた、的確に言葉で表せる、をやっぱり期待します。あとは、私とかよりも経験が豊富なはずなんですね。いろいろなことに対する経験を生かして、対応事例をまさに目の前で見せてくれるとありがたいな、と思います。そして、その場でお客様相手に対応した後で、共有できるような場がもっとあるといいんですが…。そういう対応は良かったのとか、振り返ることができる場がもっとあるといいなと思っています。加藤先生が対談の時に、「アイヌという部分と、日本という部分を交換して考えてみる」という旨をおっしゃってたと思うのですけど、私自身お客様への対応をするときに、会話の中でよく用いますね。

…ということで、答えになっているでしょうか。一旦、時間もないので以上です。ありがとうございます。

モコットゥナシ：ウポポイでの研究による復興の実践例というものをお話ししていただけたので、このようにこの施設が行っている仕事の中には、実際に人がやってそれを身につけるということも割合としてかなり多くあります。丸木舟のように作り方はもうわかっているけれども、しかし、わかってても作ってみないと自分で身につけることができない既存の技術を維持するというものと、それからクマ繋ぎ杭のように新しくチャレンジして分かるようになっていくというものがあると思うんですね。そして、いろいろな課題について以前はなかなか話す場がなかったということが課題だったんですけれども、新しく委員会というものが立ち上がってその可能性について紹介をしていただくことができました。そこで、ムカラさんにお伺いしてみたいのは、例えばクマ繋ぎ杭を一つの例としてですね、復興研究ということをしていくときにどれぐらいの時間が必要なのか、また予算などは確保されているのかということについてお考えを伺えればというふうに思います。リスク委員会というご提案も大変いいものだというふうに私は感じました。

ムカラ：復興研究についてクマ繋ぎ杭を事例として挙げさせていただきましたが、それにかかった時間については先行研究とか諸々の部分まで含めると何十年という形になってしまうのかなと思います。

ここでは、私がクマ繋ぎ杭の復元のお話をいただいてから、いろいろな資料の調査や制作を含めると約2年かかりました。ただ、2年間それだけをやっていたわけではないので、おおよその時間ではありますが、やっぱり新たなことを復興していくというのは時間のかかることだなと実感しております。

それから先ほど話にも出たように、このような調査研究というのは時間もかかることですが、時間を確保できているかと言われれば、体制として整えられていない現状ではあります。そこは、これから検討できればと思っています。あと予算の部分が少し出ていましたけれど、主な調査の対象とした資料というのが海外に収蔵されているので、そこへの旅費だとか、人件費とういうものが主な経費になるかと思います。ただ、今回は北原さんやいろいろな研究者の方の先行研究から情報をいただいて復元させていただきましたので、予算はそこまでかかっていないと思います。それよりも素材の確保がとても重要な課題になります。

今回制作した主な素材として、実物資料から研究者の方々の助言をいただき、文献を確認してオオカサスゲというスゲ科の植物を利用していることがわかりました。資料を見る際にはいろいろな視点で観察し、助言をいただくことで知りえなかった情報を学ぶことにもなりました。それから、オオカサスゲは本州では絶滅危惧種Ⅰ類にもなっている貴重な植物で簡単に採取することができないということも、この調査でわかりました。ただ、アイヌ文化では結構ポピュラーな植物として取り扱っていたものです。今はそういったものがたくさんありますので、そのような素材の確保とかですね。どこに生えているのかというようなこともこれからアイヌ文化を伝承していくには大事なことだと思います。

モコットゥナシ：イサイカさんの話ですね。アイヌに見えないって言われる体験は、やはりアイヌとしてのアイデンティティを持っている人とそう

でない場合で受け止め方が全く違ってくる。このような発言は「アイヌの外見はこう」というステレオタイプが蔓延しているから起こるズレですよね。アイヌっていうのは見ればわかるぐらい違うものなのだっていうステレオタイプがあって、それを前提に「あんた全然そう見えないね」という人がいる。耳を疑うかもしれませんが、私もそういうことをよく言われます。それから北嶋さんのご報告の中には、上司に相談をしても、同情されるだけで終わってしまうというお話もありました。これにぴったりな本がありまして、『差別は思いやりでは解決しない』(神谷悠一著、2022年、集英社新書）こういうぴったりなタイトルの本があります。こういうものが広く読まれるようになっていくといいのかなというふうに思います。

また、研究だけじゃなくモノづくりや歌、踊りなど、実際に行う文化伝承について考慮してほしい。そうしないと文化伝承に対する誇りが削られていく。ここで働くことを諦める人が出てくる可能性もある。というお話がありましたけれども、ここについてもう少し詳しくお話いただければと思います。

イサイカ：文化伝承のことですが、私はモノ造りをしていて、業務として札幌大学や北海道アイヌ協会の刺繍教室の講師をやらせていただいています。当館では、サイボウズという場所の管理をしているところを見て、部屋が空いていたらいつでも誰でも使えます。ですが、会議などで部屋を使っている場合はモノ造りができず、廊下で作業をしている状態です。見本を作るだけではなく、教育普及室の事業には、館外のアイヌ民族を対象とする研修事業があります。ここにもモノ造りに関する実習的要素があります。こうした需要に応えるため、修復復元室の活用方法の検討を希望します。

大学などの技術講習のために使う見本等を作る場所についても、他の分野には専門の部屋があるので、モノ造りについても専門の部屋の検討を願います。現状の暗くて寒い廊下での作業は、モノ造りという立場はとても低く見られているような気持ちになり、惨めな気持ちで見本を作製しています。このような気持ちをこれから入社するであろう技術を持った学芸員に引き継ぎたくないので、職場環境を少しでも整備して、次の世代に引き渡したいと願っています。

今までの物質文化関係の学者の方々がモノの歴史等を調べ、本にしてくださっていることに感謝していますし、とても大切なことだと思います。だけど、苦情でも何でもないのですが、モノ造りをしている立場として見ると、作り方とか構造とか技法に関する調査があまりされていないと感じます。これは、既存の研究が実践を視野に入れてこなかったためではないでしょうか。私はモノ造りをしていますので、技術に関する調査研究を行いたいと考えています。ウポポイではここにいるムカラさんをはじめ、各地のモノ造りをする若手が集まっているので、博物館と公園ではやることが違うかもしれないのですが、公園職員だから資料の熟覧をしづらいということのないよう、一緒（同等）に調査研究等をしていけたらと考えています。

モコットゥナシ：ラリウさんについては、ご自分はルーツはアイヌにあるかもしれないけれども、アイデンティティとしては和民族であるということで、ある意味自分がその加害をする側に立つという場面が多いという中での発言をしていただくということで、非常につらい体験を強いてしまったかなというふうに思いました。私もマイクロアグレッションを受けることも多いですけど、自分がやってしまうことも非常に多いので、ある意味ではどんな人も常に加害者になり得るというつもりで私もラリウさんのお話を聞いていました。それを踏まえてマジョリティからマジョリティに対して伝えることには非常に大きな意味があると思ってですね、過酷な経験をしつつも、発表してくださったことに感謝をしたい。何か補足したいことがあれば発言していただければと思います。よろしいでしょうか。

ラリウ：わたしの発表の補足としましては、発表の最初の方に言ったように、わたしはアイヌ民族の状況とかアイヌ文化のこととか何も知らずに就職して、ウポポイに来て初めて深く勉強させてもらったので、就職してすぐは、今振り返ると

あの発言はマイクロアグレッションだったな、と思うことをしていました。未だに思い出して自己嫌悪になることがあるんですけど、今後新しい職員が入ってくる中でそういうことが起こり得ないとは絶対に言えないので、そういうことを防いでいくためにも、職員教育の場でマイクロアグレッションの視点を導入するということは必要だと思います。